

第 2 章 史跡の概要と現状

第 1 節 指定の状況

第 1 項 指定告示及び指定理由

- ・ **指定名称** 安田城跡（やすだじょうせき）
- ・ **所在地** 富山市婦中町安田字殿町割 348 番 1 外
- ・ **指定年月日** 昭和 56 年 2 月 23 日
- ・ **指定面積** 34,388 m² ※実測面積、公有化面積も同じ
- ・ **指定理由**
 - ア 基準 特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準 史跡 2（城跡）による。
 - イ 説明 安田城跡は、神通川支流の井田川の氾濫低湿地を防禦上の立地条件とした中世の平城跡である。佐々氏時代のころから使われ、後に前田氏の武将岡島氏が使用した。元和一国一城令以前の戦国最末期の城郭の形態を示すものとして重要である。
- ・ **官報告示** 昭和 56 年 2 月 23 日付け文部省告示第 24 号
- ・ **土地所有者・管理団体** 富山市

○文部省告示第 24 号

文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 69 条第 1 項の規定により、次の表に掲げる記念物を史跡に指定する。

平成 56 年 2 月 23 日

文部大臣 田中龍夫

名 称	所 在 地	地 域
安田城跡	富山県婦負郡 婦中町安田字 外川原	284 番 2、292 番 2、293 番 2、302 番 2、303 番 2、310 番 2、311 番 2、 318 番 2、319 番 2、325 番 2、326 番、332 番 2、333 番、334 番、335 番、336 番 2、338 番 2、339 番、340 番 2、341 番 2、342 番 3、343 番 3
	同 字殿町割	346 番 1、348 番 1、349 番 4、350 番、351 番、352 番 1、353 番 3、 354 番 1、354 番 2、355 番、356 番、357 番、358 番、359 番、360 番、361 番、362 番、363 番、364 番、365 番、366 番、367 番、368 番、369 番、370 番、371 番、372 番、373 番、374 番、375 番、376 番、377 番、378 番、379 番、380 番、381 番、382 番、383 番、384 番、385 番、386 番、388 番、389 番、390 番、391 番、392 番、393 番、394 番、395 番、396 番、397 番、398 番、400 番、402 番、403 番、404 番、405 番、406 番、407 番、408 番、409 番、410 番、411 番、412 番、413 番、414 番、415 番、416 番 2、417 番 2、418 番、 419 番 1
	同 字殿町	519 番 1、520 番、521 番 1、523 番 1、524 番 1、527 番、528 番、529 番、530 番、531 番、532 番、533 番、534 番、535 番、536 番、537 番、538 番、539 番、540 番、541 番、542 番、543 番、544 番、545 番、546 番、547 番、548 番、549 番、550 番、551 番、552 番 1、552

	番 2、553 番、554 番、555 番、557 番、558 番、559 番、560 番、561 番、562 番、563 番、564 番、565 番、566 番、567 番、568 番、569 番、570 番、571 番、572 番、573 番、574 番、575 番、576 番、577 番、578 番、579 番、580 番、581 番、582 番、583 番、584 番、585 番、586 番、587 番、588 番、589 番、590 番、591 番、592 番、593 番、594 番、595 番、596 番、597 番、598 番、599 番、600 番、601 番、602 番、603 番、604 番、605 番、606 番、607 番、608 番、609 番、610 番、611 番、612 番、613 番、614 番、615 番、616 番、617 番、618 番、619 番、620 番、621 番、622 番、623 番、624 番、625 番、626 番、627 番、628 番、629 番 1、629 番 2、630 番、631 番、632 番、633 番 1、633 番 2、634 番、635 番、636 番、637 番、638 番、639 番、640 番、641 番、642 番、643 番、644 番、645 番、646 番、647 番、648 番、649 番、650 番、651 番、652 番、653 番 3、659 番 3、661 番、662 番、663 番、664 番、665 番、666 番、667 番、668 番、717 番 2、718 番 2、719 番 2、722 番 2、723 番 2、726 番 2、727 番 2、729 番 2、730 番 2、733 番 2、734 番 2、738 番 2、739 番 2、743 番 2
同 字浦野割	1440 番 2、1440 番 3、1440 番 4、1449 番 1、1450 番 1 右の地域内に介在する里道敷、水路敷及び廃川敷を含む。

第 2 項 指定説明

安田城跡は神通川の支流井田川の氾濫低湿地を防禦に利用した戦国末期の平城遺構である。大字安田字殿町割にあり井田川左岸の微高地上にある。旧飛騨街道に面した大門という屋号の家があった場所より大門道と呼ばれる道が城内に通じている。安田城の占地はこの陸上交通と井田川の河川交通をも重視したものである。

昭和 52・53 年圃場整備事業との関連で富山県埋蔵文化財センターが試掘調査を行った結果、堀、土橋の遺構が検出され、金沢市立図書館に残る安田城古図に合致する遺構が残っていることが確認された。即ち古図には三つの曲輪が記されているが、それは現在大城、小城、鐘突堂と呼ばれる地域に微高地として残っている（鐘突堂は削平が著しい）。中世には本丸、二の丸という呼称より大城、小城という呼称を用いる場合があったこと、また鐘突堂のように城郭間の連絡機能がよくわかる。他に孫左屋敷、塀廻、堀という地名もある。

『越登賀三州志』によれば天正 13（1585）年豊臣秀吉は越中攻の際、富山城の佐々成政を攻撃する前進基地として呉服山陣城即ち白鳥城にあった前田氏の部将岡島一吉をこの城に移している。岡島一吉は天正 18（1588）年に安田城大門に隣接する中堂寺に田畑を寄進しており（中堂寺文書写）、佐々氏降服後も安田城が恒常的に使用されたと考えられる。また『越登賀三州志』は天正 7（1579）年以降しばしば文献に登場する安城を安田城のこととしている。佐々氏時代よりの城ということになるが、安城即ち安田城であるかはなお検討を要する。

戦国時代の平城は近世以来の耕作や、昨今の圃場整備・宅造によって失われたものが多い。そのような事情を考慮し、比較的よく遺構の残る安田城跡を指定し保存をはかるものである。

引用：『月刊文化財 昭和 54 年 6 月号（第 189 号）』文化庁文化財保護部監修 昭和 54 年 6 月 1 日発行 第一法規株式会社

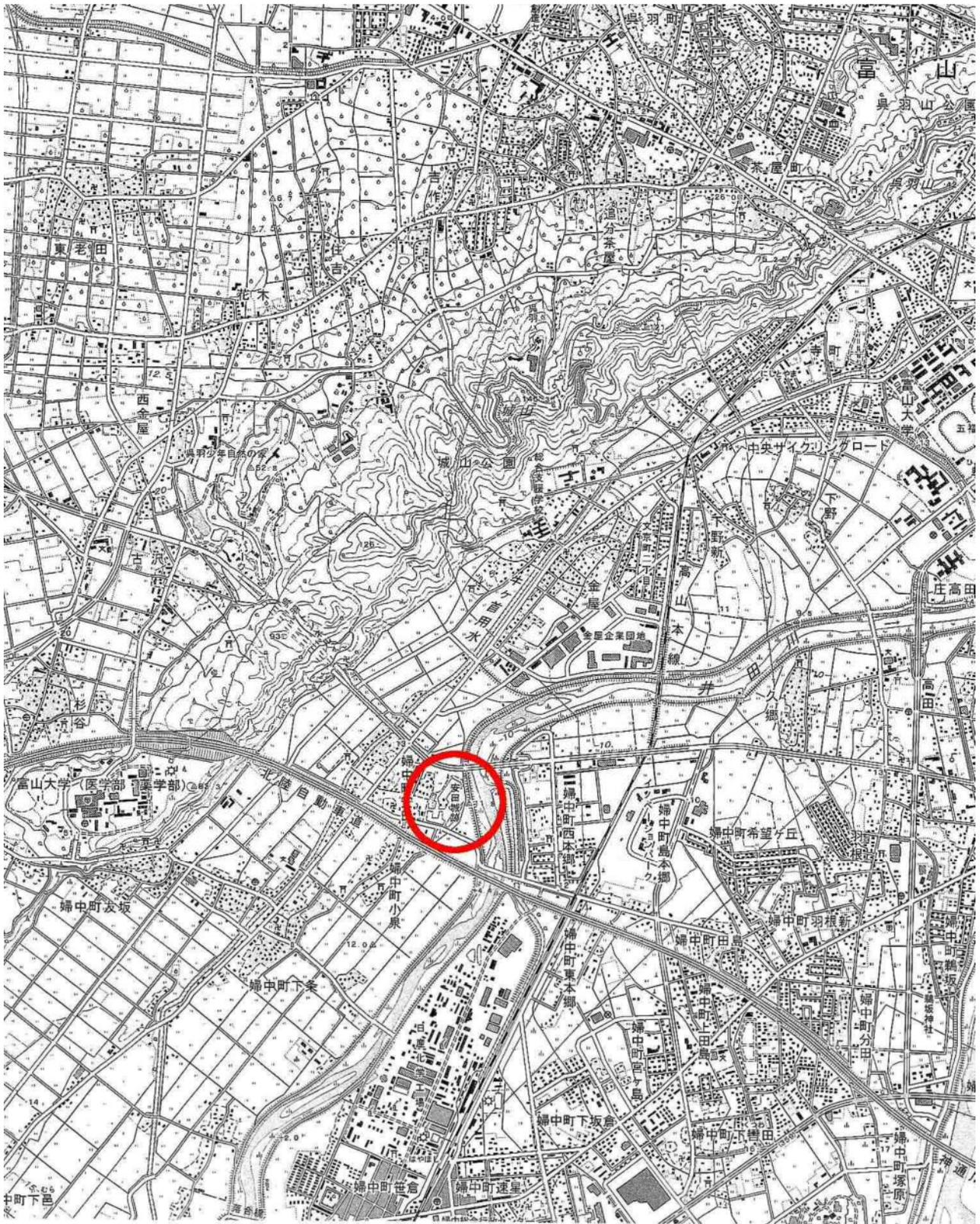


図 2-1 史跡安田城跡の位置

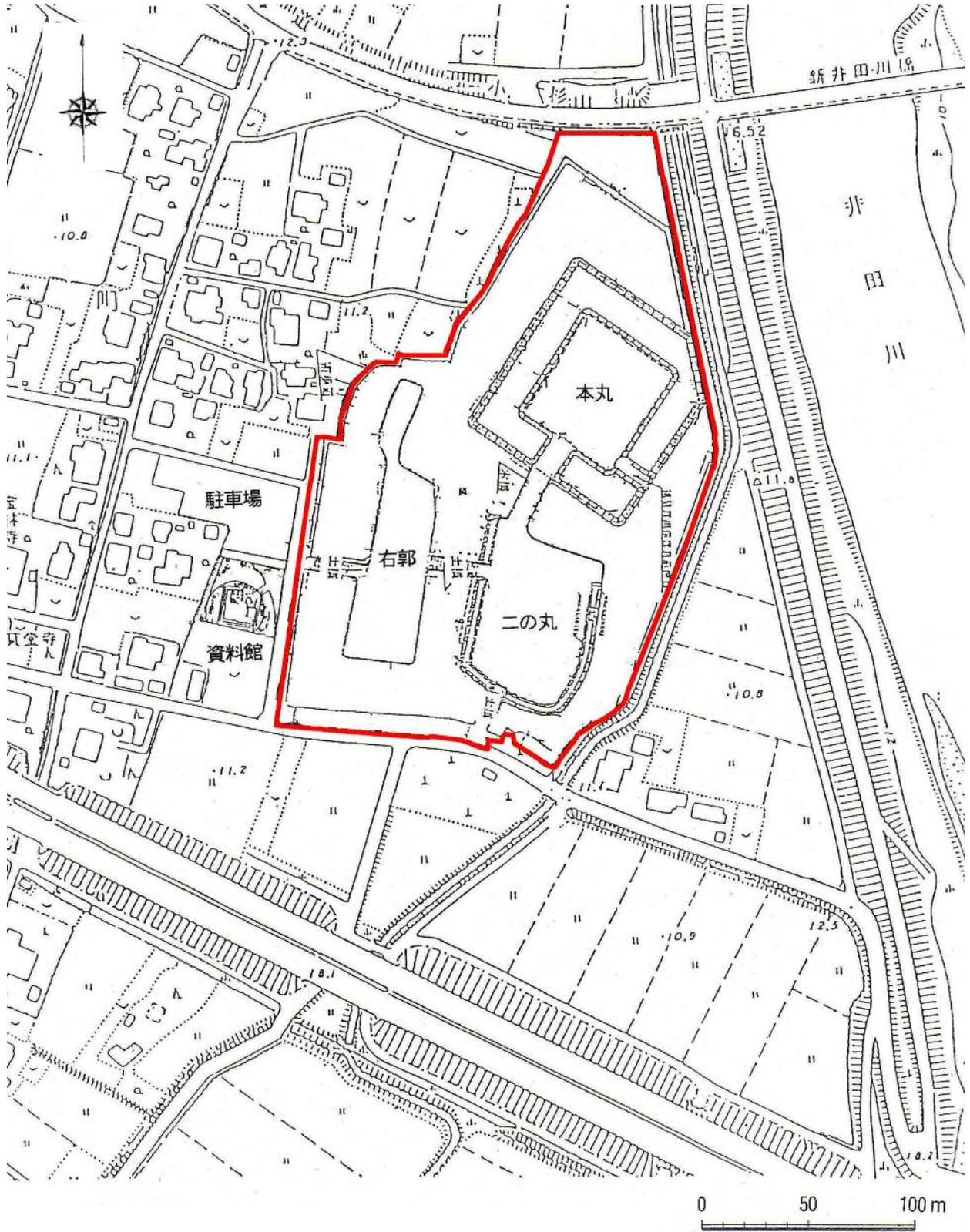


図 2-2 史跡安田城跡の指定範囲

第2節 史跡の現状

第1項 富山市の自然環境

1. 位置と地形

富山市は、富山県の中央部に位置し、東側は常願寺川を境に中新川郡、東南は長野県に接するとともに、南側は飛騨山地に続く山々で岐阜県と接しており、西側は呉羽丘陵を越えて射水市及び砺波広域圏に接し、北側は日本海の富山湾に面している。

市域は、東西約 60.6 km、南北約 44 km で、面積は 1,241.77 ㎡ と富山県の約 3 割を占め、県庁所在地では 2 番目の大きさとなる。

市の東南部には日本を代表する 3,000m 級の山岳のある立山連峰があり、西部には飛騨高原の丘陵性山地に連なる呉羽丘陵が横たわっている。これらの山々を源として、神通川や常願寺川などの大小の河川が中山間地域を通り、北に向かって扇状に扇状地を作り出し、市の北側には大きな平野が広がっている。河川は、やがて豊富な魚介類をはぐくむ富山湾へ注いでいる。富山湾の海底は、最もふかいところでは 1,200m 以上あり、日本海側では数少ない急峻で複雑な海底地形を有している。

2. 気候

富山市は、典型的な日本海側の気候であり、初夏から秋にかけての降雨や、冬の冷たい季節風が対馬暖流を吹走することで、降水・降雪の多い地域となっている。

富山气象台による平年値（1981～2010）では、降水量が年間 2,300 mm、相対湿度が全国で最も高く年平均 77% となる。

気温は、年平均が 14.1℃ であり、夏季は、最高気温の平均が 8 月には 30.9℃ と非常に蒸し暑くなり、平成 30 年には 39℃ を超える日もあった。

晩秋から初冬にかけて、冷たい季節風の影響で「ブリ起こし」と呼ばれる雷が発生する。

冬季は、西高東低の気圧配置が多くなり、日照時間が短く、最低気温の平均が 2 月に -0.3℃ と最も低温となるが、比較的温暖な対馬海流の影響から氷点下になる日は多くない。雪が降る日数は平均 56 日である。

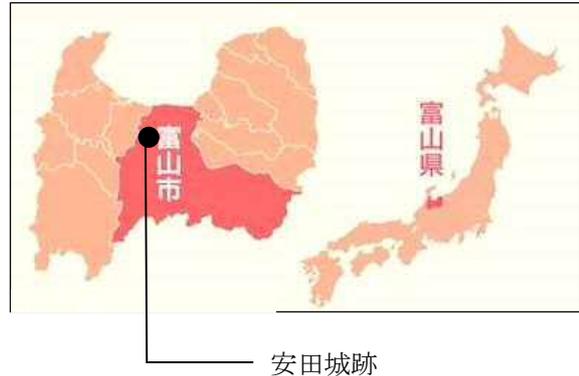


図 2-3 富山市の位置

（富山市 2018『富山市勢要覧』に加筆）

富山市の平年値

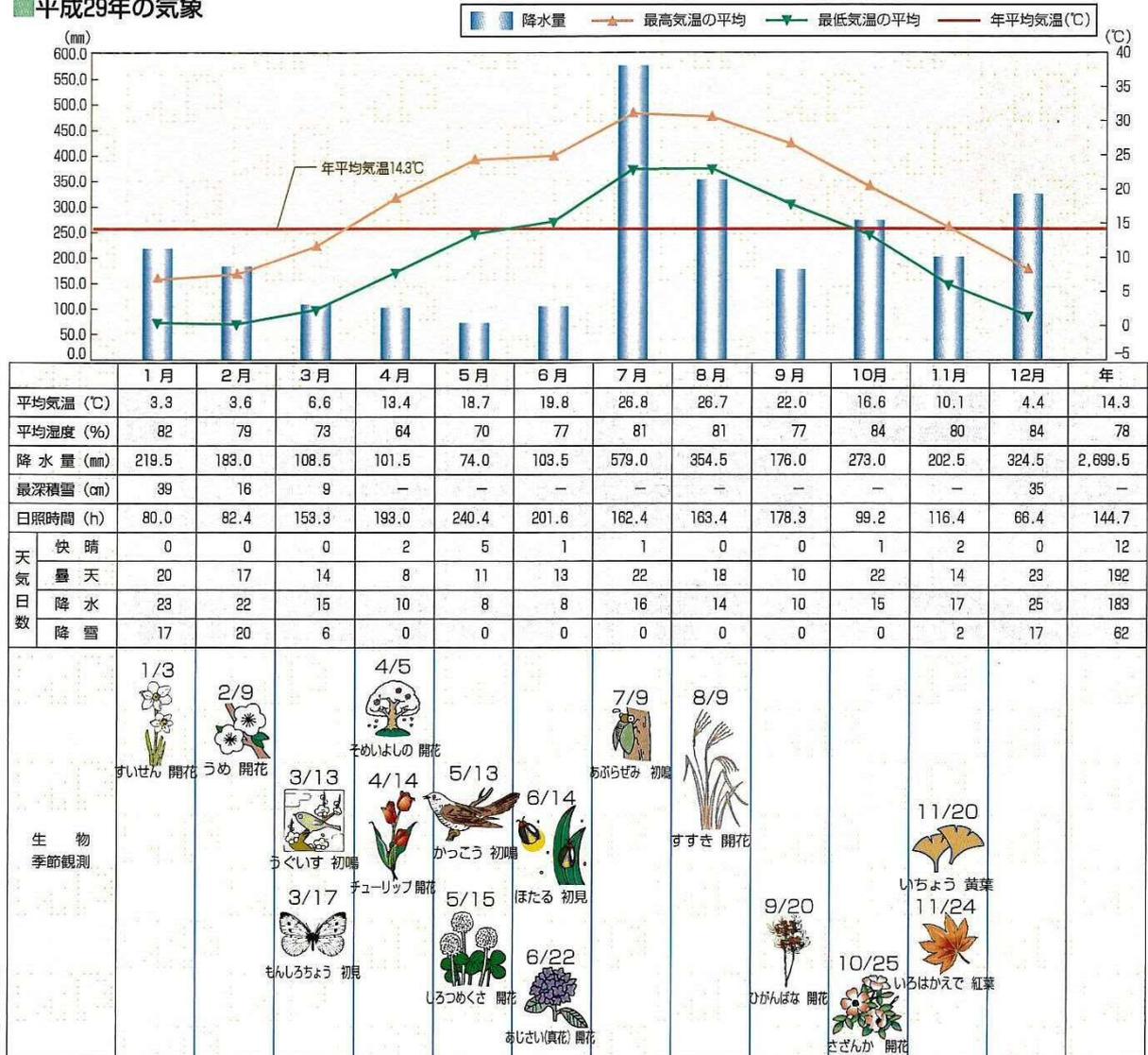
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
平均気温 (℃)	2.7	3.0	6.3	12.1	17.0	20.9	24.9	26.6	22.3	16.4	10.8	5.7	14.1
平均湿度 (%)	82	79	73	69	72	79	81	77	79	77	77	80	77
降水量 (mm)	259.5	172.1	158.5	122.2	134.2	182.6	240.4	168.3	220.2	160.7	234.4	247.0	2,300.0
最深積雪 (cm)	51	50	21	0	—	—	—	—	—	—	1	23	62
日照時間 (h)	68.1	86.3	131.3	174.9	191.1	150.2	147.1	201.3	133.1	142.7	102.8	75.8	1,612.1

注) 1981～2010年までの平均値

資料：富山地方気象台

表 2-1 富山市の平年値（富山市 2018『2018 統計にみる富山市』）

■平成29年の気象



資料：富山地方気象台

表 2-2 平成 29 年の富山市の気象 (富山市 2018 『2018 統計にみる富山市』)

3. 富山県の植物

富山県は標高 3,000m級の北アルプスから海岸まで変化に富む地形を有しており、且つ標高差が大きいことや、積雪に適応・分化した多雪地帯特有の植物が多くみられることから、植物の種は全体として多様であるといわれている。富山県植物誌(1983年)にはシダ植物以上の維管束植物が 2,445 種類掲載されているが、その後 350 種類が新しく確認されており、現在植物誌改訂の作業が進められている。県固有の野生植物はエッチュウミセバヤだけであるが、最近、菊咲き性品種をはじめとする富山県固有のサクラ栽培品種が多数見つかっている。

環境省による第 5 回自然環境保全基礎調査(平成 6 年度～10 年度)によると、富山県では、植生自然度 10 または 9 (自然度の高い天然林及び自然草原) の地域が県土に占める割合は 30% と高く、本州では第 1 位にランクされるなど、優れた自然が保持されている。

海岸部には、クロマツに代表される海岸林が分布しており、おおむね保安林として管理されている。氷見海岸や宮崎海岸の一部には、スダジイやタブノキなど暖帯性の樹林がみられる。

丘陵帯における標高別の植生は、低山帯（標高約 300mまで）ではコナラやアカマツなどの二次林やスギの植林地となっており、山地帯（標高約 300～1,600m）ではブナやミズナラなどの天然林が中心となっている。亜高山帯（標高約 1,600～2,400m）では、オオシラビソなどの針葉樹やダケカンバが分布している。これ以上は、ハイマツ低木林やチングルマなどの雪田群落がみられる高山帯となる。

絶滅のおそれのある野生生物を取りまとめたものとして、全国版の環境省のレッドデータブックほか、富山県では県版のレッドデータブックが作成されている。『レッドデータブックとやま 2012』には、絶滅もしくは絶滅のおそれのある野生生物として、維管束植物や菌類などの植物が 517 種選定されている。平成 14 年に発刊したレッドデータブックと比較すると、絶滅のおそれのある植物は全ての分類群で増加しており、希少な植物の生息・生育環境の悪化が懸念されている。

（参考文献：富山県 2014『富山県生物多様性保全推進プラン』）

4. 富山県の動物

富山県の地形は、標高 3,000m級の北アルプスから水深 1,000mの富山湾まで、日本有数の大きな高低差を有しており、この垂直的な広がりの中に多様な自然環境が含まれ、それぞれに適応した多種の野生動物が生息している。

哺乳類は、在来種で 46 種が確認されており、これは日本産在来種の 41.4%にあたる。山地帯から低山帯にかけての森林地域にはカモシカやニホンザル、キツネ、タヌキ、ツキノワグマ、テン、ニホンリス、アカネズミなどの大～小型の種が多く生息し、近年はイノシシやニホンジカがみられるようになった。高山から亜高山にかけては環境条件が厳しいため、アズミトガリネズミやオコジョなどの限られた種が生息している。

鳥類は、320 種ほどが記録されており、丘陵から山地帯にはヤマガラなどのカラ類やコゲラなどのキツツキ類、海辺や河川にはカルガモなどのカモ類、イソシギ・コチドリなどのシギ・チドリ類といった多様な鳥類が生息している。高山・亜高山帯ではライチョウやホシガラスなどの限られた種が生息している。県内の構成は、冬鳥や旅鳥が最も多くなっており、冬鳥の構成比率が高いのは、越冬のため大陸から南下、渡来する種が多いためといわれている。

爬虫類は、陸生のもので在来種 14 種が確認されている。日本固有種のニホンイシガメは生息場所の消失により県内での生息地が極めて限られている。

両生類は、県内では在来種 18 種が確認されており、平野部の水田にはニホンアマガエルやトノサマガエルが生息し、山地の池沼にはイモリやクロサンショウウオ、モリアオガエルが、谷川にはカジカガエルやヒダサンショウウオが産卵にやってくる。特に、里山の浸出水などがある緩流のような限られた水系にはホクリクサンショウウオが生息している。

淡水魚は、南北双方から日本列島に侵入してきた魚類に由来しているとされており、約 70 種の淡水魚が生息している。河川の上流域にはイワナやヤマメなどが、中流にはアユやウグイなどが、下流にはコイやフナ類などが生息している。平野部の小川にはメダカやタナゴなどの仲間が、湧水帯にはスナヤツメ類やトミヨなどが生息している。

昆虫は、約 8,000 種生息すると見込まれており、移動性が少ないため寒地性昆虫と暖地性昆虫が生息し、多様な昆虫相を現出している。平野部や海岸部は植生が単純であり、生息環境も

限定されるため、昆虫相も限られるが、低山帯には生息種が多く、チョウの仲間ではギフチョウやオオムラサキなどの貴重な生息地となっている。また、高山・亜高山帯では厳しい自然環境にも関わらず高地性の昆虫が生息しており、ミヤマモンキチョウなどの高山蝶が見られる。近年は、本県においてもゲンゴロウやコオイムシなどの水生昆虫の減少が懸念されている。

軟体動物では、淡水産貝類は35種以上が確認されており、主に平野部を流れる河川や水田、用排水路、溜池に生息している。陸産貝類は100種余りが生息しており、植生が多様であることや陸産貝類が多い石灰岩地帯が多いことから、富山県の陸産貝類相は決して貧弱ではないといわれている。

甲殻類は海で多くの種に分かれた動物群であるが、ミジンコ類やカニ類の中には淡水域に生息するものもいる。県内の陸域に生息する種については、31種が報告されている。

海洋生物類としては、富山湾にはブリをはじめ、マアジやクロダイなど、日本海に分布する約1,300種の魚類のうち約600種が確認されており、生物多様性が豊富な海域といえる。対馬暖流の影響を受けたイワシやクロマグロ等の暖水系の魚類や、水深300mより深い日本海固有水で生息するゲンゲ類やビクニン類等の冷水系の魚類からなっている。富山湾ではこれらの魚類以外にも、軟体動物が約600種、甲殻類（微小のもの除く）が約200種、環形動物（多毛類）が約70種、棘皮動物（ヒトデ類）及び脊索動物（ホヤ類）がそれぞれ約20種確認されており、深海で生息するオオグチボヤの群生地が、日本近海ではじめて確認されている。

また、海流に乗ってやってくる生物も含め、海棲哺乳類では、ミンククジラなど約15種の鯨類、ゴマフアザラシなど3種の鰭脚類、爬虫類では、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、オサガメの4種が確認されている。

富山県内の絶滅のおそれのある野生生物を取りまとめた『レッドデータブックとやま2012』には、絶滅もしくは絶滅のおそれのある野生生物として、哺乳類や鳥類、昆虫類などの動物が382種選定されている。平成14年に発刊したレッドデータブックと比較すると、絶滅のおそれのある動物は哺乳類を除いた全ての分類群で増加しており、希少な動物の生息・生育環境の悪化が懸念されている。

（参考文献：富山県2014『富山県生物多様性保全推進プラン』）

第2項 富山市の歴史的環境

1. 時代概説

(1) 旧石器時代

富山市域の旧石器時代の遺跡は、南部の神通川右岸に位置する船舥台地と西部の呉羽丘陵・射水丘陵周辺を中心に約60ヶ所が知られている。

史跡直坂遺跡（直坂Ⅰ遺跡）では調理の跡とみられる焼けた礫群がある。野沢遺跡では石器の集中状況から3つの世帯からなる集落が想定されている。

富山県は列島の中央に位置することから、東日本に特徴的な石器と西日本に特徴的な石器の分布域が重なり合い、両方の石器が出土している。東日本では、東北地方の東山系石器群に代表される石刃技法が発達する。野沢遺跡では東山系のナイフ形石器等が出土している。また、野沢遺跡や直坂遺跡の石器は接合するものが多く、原石から剥片を剥ぎ取っていく過程が分かる資料として重要である。一方、西日本では瀬戸内技法による石器作りが発達する。境野新遺跡・直坂Ⅱ遺跡では、瀬戸内技法による横長剥片を素材としたナイフ形石器がある。境野新遺跡は東日本系の石器もあり、一つの遺跡で東西の技法の石器が出土している。

旧石器時代末から縄文時代草創期にかけて、それまでのナイフ形石器に代わり、槍の柄にはめ込む細石刃、槍先として使われた尖頭器・有舌尖頭器や石鏃が主要な石器となる。これは、温暖化で狩猟対象となる動物相が小型化したことが背景にあると考えられる。向野池遺跡では細石刃を剥離するための石核が採集されている。八木山大野遺跡や鏡坂Ⅰ遺跡の有舌尖頭器は、下呂石で作られ、岐阜地域との交流を示している。

(2) 縄文時代

富山市域の縄文時代早期の遺跡は、山間部や丘陵地に多くみられる。船舥台地の史跡直坂遺跡からは、模様を彫った棒を土器に押しつけ、転がして文様をつける回転押型文土器が多く見つかっている。この文様は、飛騨・信州・近畿・東海地方との関連を示している。

縄文時代前期には海岸沿いに縄文海進で形成された潟湖が広がっていた。小竹貝塚は、その潟湖べりに形成された日本海側最大級の貝塚である。貝層は東西90m南北170mの範囲に弧状に広がり、その中央の高台に竪穴建物などの居住域があり、居住域の南東側には木製品加工場や土器廃棄場が確認された。貝層範囲の居住域との境は墓域で、これまでに100体の埋葬人骨が発見されている。埋葬方法は、主に屈葬（石を胸に抱かせた抱石葬など）で、新生児は土器棺で埋葬されていた。人骨の形態分析やDNA分析などの結果、縄文時代前期には、この地に北方系と南方系という異なる起源地を持つ可能性のあるDNAの系統が混在していることが分かった。出土した貝類は、ヤマトシジミが9割以上を占め、旧放生津潟で食用に採取していたと考えられる。骨では、魚骨・カモなどの鳥骨・クジラ・イルカ・ニホンジカ・イノシシ・イヌ等が出土した。中でもイヌの骨は解体痕がなく、人骨の傍などに埋葬されているものが殆どであったため、飼育されていたと考えられる。

縄文時代中期の遺跡では、北代遺跡がある。この遺跡は、北陸を代表する縄文時代の集落跡として国史跡に指定され、現在は「富山市北代縄文広場」として高床倉庫1棟や竪穴住居5棟などが復元され、市民の憩いの場・歴史学習の場として親しまれている。発掘調査では、東西280m、南北200mの範囲に縄文時代の竪穴住居が75棟以上、中央部分には高床建物跡が4棟以

上確認された。縄文時代の竪穴住居は従来、民俗例から茅葺屋根であったと推測されてきたが、近年各地の発掘調査で検出された焼失住居の分析から土屋根の住居の存在が確認されており、北代遺跡でも土屋根の痕跡が発見されている。出土品には、縄文土器や各種石器のほか、呪術具として土偶、三角壺形土製品、タカラ貝形土製品がある。

縄文時代中期の東日本の特徴的な集落形態は、広場や墓地に中央に設定した周囲に円を描くように竪穴住居を配置した環状集落である。開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の集落跡は、中央に円形の広場があり、その周囲に掘立柱建物群、さらに外周に竪穴住居群が同心円状に分布する構造になっている。また、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡では長辺 11.5m の掘立柱建物、追分茶屋遺跡では直径 11m の竪穴住居、東黒牧上野(A地区)遺跡では長辺 8m の竪穴住居が確認された。これらの大型建物は、共同作業場や儀礼の場など様々な目的で使用されたと推測されている。

富山の縄文土器文化は、蛸ヶ森式、新保・新崎式、天神山・古府式、串田新式など、前期から中期において特に地域性の高い固有の土器文化が展開し、周辺地域へも波及した。サルボウを使った貝殻腹縁文など特徴的な文様は、周辺地域の土器文様と融合した例もみられる。また玉抱三叉文は彫刻石棒にも採用され、飛騨方面への広がりを示している。

呪術の道具あるいはその可能性が考えられる用途不明の道具としては、土偶、御物石器、石冠、石棒などが出土している。長岡八町遺跡では、北陸で最大級の仮面を付けた土偶の頭部が出土し、頭部の大きさから土偶の全長は約 38 cm と推定されている。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は、中期までは散在する程度であるが、後期から終末期に急激に増加し、この時期に人びとが新たな開拓地を求めて移住してきたことが分かる。遺跡は大きく 3 つの地域に分布し、内陸部では呉羽丘陵から井田川・山田川流域(婦負地域)と白岩川流域、海岸部では神通川の河口付近に集中する。分布状況からは、集落が河川流域単位でまとまって地域共同体を形成していたことが分かる。

婦負地域は、弥生時代終わり頃に数多くの集落や墳墓が出現し、一部は「史跡王塚・千坊山遺跡群」として史跡指定されている。婦負地域を大きく特徴づけるのが、山陰に源流をもつ四隅突出型墳丘墓(六治古塚墳墓、富崎墳墓群、鏡坂墳墓群、杉谷 4 号墳)で、四隅突出型墳丘墓分布域の最北端にあたる。一辺約 25m と県内でも傑出した規模を誇るこの墳墓は、この地域の独自性と先進性を表している。墳墓からは埋葬儀礼に使用された土器が出土し、小型台付装飾壺などの装飾性の高い祭祀用土器もみられる。方形周溝墓群の杉谷 A 遺跡の埋葬施設からは、素環頭鉄刀・ヤリガンナ・刀子などの鉄製品や銅鏃、ガラス小玉などの副葬品が出土し、周溝には底部を意図的に穿孔した祭祀用の壺が出土した。史跡王塚・千坊山遺跡群の一つである千坊山遺跡の集落では、竪穴住居跡 25 棟を検出した。この地域には環濠をめぐらした高地性集落も確認されており(富崎赤坂・離山砦遺跡、白鳥城跡)、当時の社会的緊張を物語っている。

海岸部に位置する打出遺跡は、旧神通川河口に位置する弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡である。弥生時代終末期の竪穴住居跡では、炭化した建築部材や焼けた土の塊が見つかった。建築部材から住居の構造を復元すると、4 本の支柱に梁・桁、垂木・小舞などの材を組み、茅を二重に葺いた後、屋根中央の煙出付近まで土を被せた土屋根住居であることが分かった。住居は、建物の廃棄に伴い意図的に燃やされたと推測される。また、鉄器製作道具や加工途中

品が出土しており、鉄の加工が行われたことが分かる。

玉作りが行なわれていた集落遺跡には、清水堂南遺跡や宮町遺跡がある。工房跡は見つっていないが、勾玉や管玉の完成品のほか、玉作りが行われたことを示す加工途中品や原石が多数出土した。使用された石材は、翡翠・蛇紋岩・緑色凝灰岩・鉄石英など様々である。

(4) 古墳時代

古墳時代前期には、史跡王塚・千坊山遺跡群では、越中の代表的な大型前方後方墳である勅使塚古墳、王塚古墳が羽根丘陵の尾根に相次いで築かれた。勅使塚古墳は全長 66m、王塚古墳は全長 58mで、高い後方部を有するのが特徴である。羽根丘陵の北にある呉羽丘陵北端では、百塚住吉遺跡と百塚遺跡に小型前方後方墳や小型前方後円墳（全長 25m程度）を含む古墳群が形成された。海岸に近く、日本海や神通川を通して新しい情報を得やすいことから、様々な形態の古墳が築造されたと考えられる。古墳群からは被葬者が身に着けた管玉、鉄鏃等が出土した。百塚住吉遺跡・百塚遺跡のような、後円部（後方部）のみ深い周溝をもつ墳墓は会津盆地で確認されている。会津盆地では、新潟や富山の影響を受けた土器が多く出土することから、両遺跡を残した集団から新しい墓造りの情報が伝えられたと考えられている。

この時期は、集落数が減少する。史跡王塚・千坊山遺跡群の周辺には、鍛冶町遺跡や南部Ⅰ遺跡などの遺跡がある。呉羽丘陵北部の中核的な集落と考えられる八町Ⅱ遺跡では、畿内系土器がまとまって出土したほか、山陰や東海の影響を受けた土器が出土している。

古墳時代中期には、呉羽丘陵南部に全長約 41mの前方後円墳である古沢塚山古墳が築かれた。また、集落では境野新遺跡などが呉羽丘陵西側に営まれたほか、八町Ⅱ遺跡では井戸を廃棄する際、稲藁などを入れた土器を井戸底に供え、滑石製の玉をばらまく儀礼が行われている。

古墳時代後期の呉羽丘陵では、全長約 20mの前方後円墳である呉羽丘陵No.26 号墳が築かれ、以降、前方後円墳は築造されなくなる。その後、飛鳥時代にかけて、番神山横穴墓群・金屋陣の穴横穴墓群など、多くの古墳が築かれた。番神山横穴墓群に含まれる呉羽山古墳（横穴式石室墳、現在は消滅）からは装飾付大刀（金銅装頭椎大刀：戦災で焼失）が出土しており、古墳群を造った集団のリーダーの墓と考えられる。横穴墓からは多量の須恵器が出土した。

この時期には、呉羽丘陵で須恵器が生産されるようになった。金屋陣の穴横穴墓群の北東約 800mにはセンガリ山窯跡がある。金屋陣の穴横穴墓群を残した有力集団によって、富山市域最古の須恵器窯が開かれたと考えられる。

(5) 古代

飛鳥・奈良・平安時代になると、遺跡数が増加し、遺跡は神通川中流域両岸の任海・友杉周辺や婦中町砂子田・中名周辺、市北部の豊田・米田周辺、常願寺川河口部の水橋地区、西の射水丘陵に集中する。古代の郡域では婦負郡と新川郡の西端部、射水郡の東端部が該当する。近年の発掘調査では、大規模な集落遺跡や官衙関連遺跡、窯業生産遺跡などが数多く検出されており、飛鳥・奈良時代に集落が出現し、平安時代に繁栄する遺跡が多い。

平安時代の大規模な集落遺跡の代表として任海宮田遺跡がある。7世紀後半から10世紀前半の集落遺跡で、これまでに竪穴住居約 200 棟、掘立柱建物 20 棟、礎石建物 1 棟、土師器焼成遺構などが検出された。約 810 点にも及ぶ墨書土器（文字内容は約 80 種）、仏鉢、鐘鈴、銅椀な

ど仏教関係遺物、灰釉陶器、緑釉陶器、円面硯、鳥形須恵器、石帯の帯飾りなどが出土している。「墾田」などの墨書土器の出土などから、神通川左岸の開発に携わった領主クラスの集落と推測されている。また、人名や役職名などと考えられる「城長」と書かれた墨書土器が多数出土している。周辺の南中田D遺跡や吉倉B遺跡、左岸の中名I・V遺跡等を合わせると400棟もの建物が神通川両岸の扇状地に形成されている。

官衙関連遺跡としては、9世紀中頃を中心とする米田大覚遺跡があり、「新川郡家」に比定されている。検出された掘立柱建物32棟は4つの建物群に分けられ、南の一群が郡庁域と推定される。正殿と脇殿が確認され、左右非対称の配置を示している。郡庁域からは208点に及ぶ墨書土器や、緑釉陶器、灰釉陶器、石帯の帯飾り、風字硯、陶製の枡、斎串などの祭祀遺物が出土している。また、常願寺川河口の8世紀から9世紀に営まれた水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、古代北陸道「水橋駅」に比定されている。

祭祀関連遺跡としては、9世紀後半の豊田大塚・中吉原遺跡がある。人為的に掘られた水路からは、人面墨書土器や斎串、人形、「×」と書いた墨書土器などが出土した。人形には人名とみられる「神服小年賀」と墨書がある。遺跡は平安期の新川郡家(米田大覚遺跡)の祭祀場の一つと推測されている。

呉羽丘陵から射水丘陵にかけては、製陶・製鉄・製炭などの古代の一大窯業生産地帯の形成があった。婦負郡域に位置する呉羽丘陵西側の斜面では、7世紀後半に県史跡金草第一古窯が操業されていた。近くには古沢窯群があり、8世紀中頃を中心に10基以上の須恵器窯が営まれていた。一方、古沢窯群から南西3kmに位置する境野新扇状地扇頂部でも、7世紀後半に平岡窯が操業された。その近くでの向野池遺跡では、9世紀中頃に土師器焼成を行っていた。この遺跡では、三面廂付き大型掘立柱建物(6間×2間)を中心とした、掘立柱建物群や井戸などが存在し、井戸からは焼成に失敗した瓦塔が出土した。周辺に生産遺跡が多いことから、大型建物は、律令体制下における郡の役所「郡雑器所」と呼ばれる、容器類の生産管理に関わる施設ではないかと推測されている。

一方、射水郡域に立地する9世紀前半の明神遺跡Ⅲ地区では、須恵器窯周辺から須恵質の瓦塔が出土した。向野池遺跡と異なり、登り窯で焼成していたことが分かる。呉羽丘陵北部の長岡杉林遺跡では、瓦塔や火舎と見られる緑釉獣脚が出土した。井戸の脇に小さな仏堂を建て、そこに瓦塔を祀ったと推測される。

射水丘陵に位置する開ヶ丘中遺跡は、須恵器生産に携わった工人集落と考えられる。その集落の最奥部には雨落ち溝をもつ礎石建物があり、その付近から土師質の瓦塔が出土した。山寺的な性格の仏堂に瓦塔を納めたと推測される。

消費地では、集落内の一角に設けた仏堂、いわゆる村落内寺院に瓦塔が置かれた例が多くみられる。吉倉B遺跡や任海宮田遺跡からは「柴寺」や「観音寺」と書かれた墨書土器が出土しているが、瓦は見つかっていない。北陸は湿気を含んだ多雪地帯でもあるために、重い屋根瓦を葺く古代寺院は多くない。その代わりに瓦塔などを祀る仏教文化が浸透したと考えられる。

(6) 中世

城跡では、平地に立地するものとして、安田城跡、大峪城跡、富山城跡(※大峪城跡、富山城跡は後述の2に記載)のほか、小出城跡、願海寺城跡、新庄城跡、太田本郷城跡などがある。

山城には、富崎城跡、長沢城、家老屋敷城、城生城跡（市史跡）、井田主馬ヶ城跡（市史跡）などがある。小出城跡は、『信長公記』等の史料に織田方の前線基地としてたびたび登場する城である。堀跡が見つかっており、南北約 150mの規模の曲輪をもつ平城と推測されている。出土品には、小さな子ども用の下駄や女性用のかんざしを含む様々な生活用品のほか、戦国期を物語る鉄砲（火縄銃）の弾、長刀の柄、腰刀や、軍馬と考えられる馬の歯や焼骨（とうこつ：前肢を構成する骨）などがある。堀の覆土は水分の多い粘質土であり、文献史料にも城周辺が「沼田」「深田」「川」であったと記されることから、自然地形を活かした要害が形成されていたことが分かる。願海寺城跡は、中世以来の街道沿いに築かれた。上杉謙信方の武将寺崎民部左衛門が拠った城であり、天正 9 年（1581）に織田信長勢に攻められ落城したと伝わる。二重以上の堀で囲んだ居館や、土橋、井戸、建物遺構などが確認されている。出土品には様々な生活用品のほか将棋駒がある。

集落遺跡では、友坂遺跡や金屋南遺跡、水橋金広・中馬場遺跡などがある。友坂遺跡は、安田城跡の 0.8 km 南にある居館跡・集落跡である。周囲を二重の大溝で方形に区画した居館跡（12～15 世紀）や土橋、掘立柱建物等が確認されている。金屋南遺跡は、安田城跡の 0.9 km 北にある鎌倉・室町時代の集落である。製鉄炉が確認され、鍋などの鋳型も多数出土していることから鋳物づくりが行われていたことが分かり、「金屋」の地名の由来と考えられる。水橋金広・中馬場遺跡は、鎌倉時代から江戸時代前期にかけて形成され、周囲を溝で方形に区画した中世の居館が確認されている。出土品としては、国内唯一の完全形を保った厚板状の双六盤のほか、ヤスで魚を突く様子などが線刻された木摺臼が注目され、鮭・鱒・鮎などの川魚捕獲加工の拠点集落と推測されている。

墓地跡としては、堀 I 遺跡（市史跡）、栗山塚、押上遺跡、塚根経塚等がある。堀 I 遺跡では、塚状遺構と配石墓が見つかった。塚状遺構は長辺約 9m、短辺約 7m、高さ約 1.1m の大きさで、石を積んで築かれる。1 基の塚の内部に多数の蔵骨器を埋納する墓は珍しいことから市史跡となった。蔵骨器の多くは、珠洲焼や八尾焼などの壺や鉢が使用されている。

（7）近世・近代

江戸時代になると富山藩 10 万石が置かれ、富山城のまわりには家臣や町人が住む城下町が形成された。城下町は、前田利長が慶長 10 年から大々的に再整備を行い、その後、城を中心に西側と南側に拡張され、繁栄していった。また、薬業や和紙などの産業が奨励され、飛騨街道や北前船航路などの交通・物流網の整備や越中売薬の独特の商法も相まって「くすりのとやま」として全国に知られるようになった。江戸時代の生産遺跡には、越中丸山窯跡（市史跡）や亀谷銀山遺跡などがある。越中丸山窯跡は越中瀬戸焼・小杉焼とならぶ越中近世三大窯の一つである。文政 12 年（1829）、京都で製陶を学んだ山本甚左衛門が郷里の丸山村で窯を開いたのが始まりで、富山藩からの援助を受け発展したという。安政 5 年（1858）の安政の大地震で窯が大破した後、次第に衰退し、明治 27 年に廃窯となった。亀谷銀山遺跡は、越中の主要鉱山「越中七かね山」の一つに数えられる。慶長年間が最盛期で、加賀藩二代藩主前田利長が産出した銀を花降銀に鋳造して、徳川家康・秀忠に献上したとされる。明治・大正期には民間会社が経営を行ったが採掘量は少なく、大正 15 年（1926）に休山した。

明治以降、富山市は県庁所在地となり、また北陸初の水力発電所が建設されるなど、豊かな

電力を基盤とした工業のまちとして発展した。昭和 20 年 8 月の空襲により市街地は壊滅的な被害を受けたが、戦後、都市基盤の整備や産業経済の進展により、日本海側有数の商工業都市として発展した。

平成 8 年には旧富山市が中核市に移行し、平成 17 年には、旧「富山市」、旧「上新川郡大沢野町、大山町」、旧「婦負郡八尾町、婦中町、山田村、細入村」の 7 市町村が合併し、新富山市が誕生した。近年は、環境、バイオ、I T 関連産業の育成に努めるとともに、立山連峰や越中おわら風の盆といった観光資源をいかした観光産業の発展や、少子高齢化や人口減少などに対応できるよう「公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくり」を目指した様々な施策に取り組んでいる。

2. 安田城跡周辺の関連する城跡

安田城跡と密接な結びつきをもった周辺の城には、白鳥城、大峪城、安養坊砦、富山城がある。以下、これらの城の概要を記す。なお、近年の研究成果については、第 2 章第 3 節第 2 項に記す。

(1) 白鳥城跡

呉羽山丘陵の最高峰の城山の山頂（標高約 145m）に所在する山城である。富山市吉作に所在し、安田城跡の北方約 2 km に位置する。城跡から東西の平野を見渡すことができ、付近には北陸道が通るなど、交通や軍事上の要衝にある。空堀や土塁など、現在も良好に残されている。

①歴史

城山一帯は呉服山・五福山などとも呼ばれ、城名は東麓に鎮座する白鳥神社に由来するとされる。文献では、『源平盛衰記』で寿永 2 年（1183）、木曾義仲の武将今井四郎兼平が山上に陣したとされるのが初見で、『太平記』では康安 2 年（1362）に越中守護であった桃井直常と戦った加賀・越前の軍勢が拠っているなどの記事がある。

『越登賀三州志』は、上杉謙信の越中進攻時、神保長職が築城したとも、天正 6 年（1578）に神保八郎左衛門が居城したとも伝えている。神保氏は戦国期に射水・婦負郡に勢力を有した国人で、天文 12 年（1543）頃に富山城を築き、その詰城として白鳥城を築城したという。

通説では、天正 13 年（1585）には富山城に拠る佐々成政を討伐す



写真 2-1 東出丸から富山城跡・大峪城跡をのぞむ

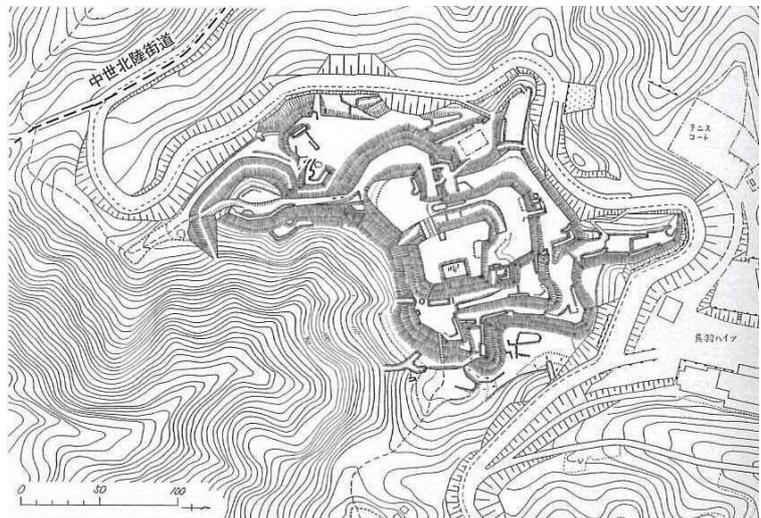


図 2-4 白鳥城の縄張図（佐伯哲也 2017）

るため、羽柴秀吉が本陣を置き、丘陵下の安田城と大峪城が出城として築かれたとされている。成政降伏後は、婦負郡を領有した前田氏の管理下となった。廃城は慶長年間（1596～1615）と考えられている。

②構造

山頂部の本丸を中心に、多数の曲輪と虎口を設け、要所を堀切や空堀で守り、斜面を切岸状にした堅固な構造であり、戦国末期の山城の形態をよく示している。

③発掘調査

昭和55年から昭和58年（1980～1983）、富山市教育委員会による試掘調査が行われ、本丸から礎石建物跡2棟（重複関係にある）のほか鍛冶遺構などが検出された。

二の丸では、建物基壇の一部とみられる方形の敷石跡5カ所、集石・石列・土坑等を検出した。焼土の存在や遺構の石に火を受けているものが多いことから、この曲輪の建物が火災になったと推測された。

西一の丸では、礎石建物跡3棟、建物に伴うとみられる石組溝、集石などを検出した。石組溝の一部も火を受けていた。

北二の丸の東側空堀は、薬研堀で、この底面から北二の丸へ登る階段遺構が検出された。空堀が城内の通路として機能していたことが明らかになった。

④弥生時代終末の高地性集落の存在

本丸では、弥生時代終末の竪穴住居跡1棟が検出され、これを取り巻く空堀の下からその時期の環濠が検出された。これらのことから弥生時代には高地性集落として利用されていたことが分かった。環濠の規模は幅2m、深さ1.5mで、中世の空堀とほぼ重なっている。



写真 2-2 白鳥城跡西一の丸

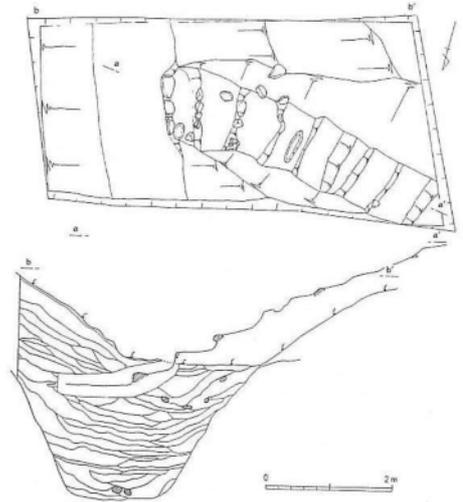


図 2-5 白鳥城跡北二の丸 堀平断面図

(2) 大峪城跡

標高17mの井田川左岸にある平城である。富山市五福字城、城ノ下割、城割に所在し、旧五福小学校の跡地にある。城は3郭構造で、規模は200m×130mである。遺構には、曲輪、土塁、堀、土橋がある。

神保長職により築城され、その後、前田氏家臣の片山伊賀守が白鳥城からこの城に移って居城したとされる。

平成元年に本丸東側で試掘調査が行

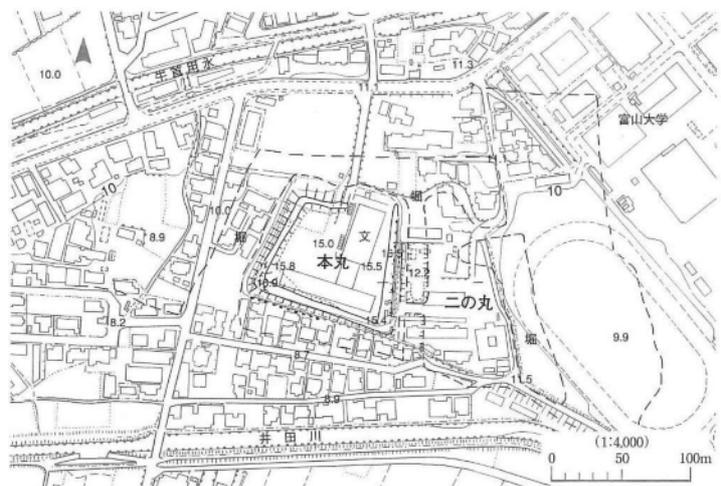


図 2-6 大峪城跡の推定範囲復元図
(富山県埋蔵文化財センター2006)

われ、堀跡と土橋が確認された。

城の古絵図は、文化年間に富山藩士の安達直章が測量した「越中大峪之古城分間之図」と脇田尚方旧蔵の「越中富山領大ガケ古城図」の2点がある。いずれも金沢市立玉川図書館所蔵（加越能文庫：金沢市指定文化財）である。『越登賀三州志』には前者が引用されている。

（3）安養坊砦跡

富山市五福字大平にある呉羽丘陵東斜面に立地し、遺跡から富山城跡が展望できる。下の平地とは60mの比高差がある。戦国時代以前には、神通川はこの直下を流れていたと推定される。

測量調査では、丘陵頂上標高72mから40mにかけて、5つの小曲輪と空堀が確認された。A郭は旧富山市天文台があった場所で最も高い所にある。B郭はA郭と連続する可能性がある。C郭は半円形状である。AからC郭北側には尾根を切断するように空堀があり、砦の北端の境界を示すものと考えられる。D郭では戦国期のかかわり1点が出土した。E郭は最下位の曲輪である。低い位置ほど面積が狭く、D・E郭は通路上に設けられた整地部分とも考えられる。この砦跡は、戦国末の砦を構成する曲輪・空堀と考えられる。

越中攻めの先遣隊である前田利家が拠った砦が存在したとする史料がある。『加越能三州地理志稿』には、「東西二十六間南北十二間壘址尚存」「天正十三年秋国祖命築砦于安養坊坂上」とあり、安養坊坂の上に47m×21mの曲輪と土塁があったとしている。砦跡の位置は、これまで大正天皇野立跡とする説があったが、現在旧地形が大きく変化したため確認できない。

当該地の直下を通る呉羽山越えの道は、江戸時代に富山と高岡をほぼ直線で結ぶ主要な幹道だった。戦国後期には国人寺崎氏が願海寺城・城下町をこのルート上に築き、交通を支配した。この砦に与えられた役割は、この主幹道の監視だったと推定される。

（以上、富山市埋蔵文化財センター（2012『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅶ』による）

ただし、この遺跡については、再整備基本計画書作成の際、再整備基本計画策定会議の高岡徹委員より、当該地の平面プランを見る限りは「安養坊砦」として積極的に評価することは難しく、空堀としている部分についても古い山越えの道の一つである可能性があるとの意見をj得ている。

同砦跡の評価については、見解が分かれるため、慎重な取り扱いが必要である。

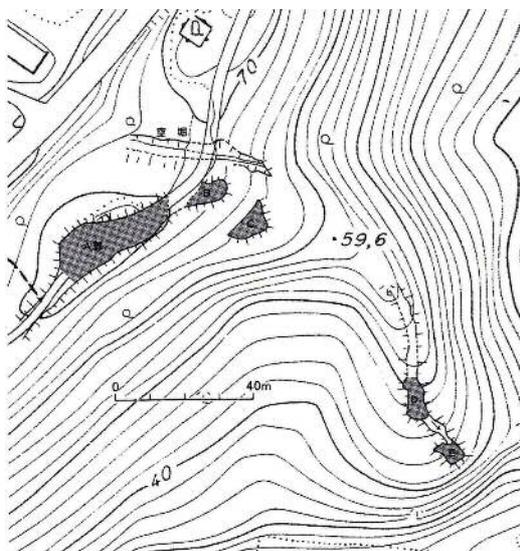


図 2-7 曲輪群・空堀の測量図



図 2-8 戦国末期以前における呉羽山周辺の城郭と交通環境（古川 2012）

(4) 富山城跡

標高 10m の旧神通川自然堤防上にある平城である。富山市本丸地内に所在し、現在は本丸・西ノ丸を中心に富山城跡公園となっている。

規模は 700m×500m で、遺構には曲輪、土塁、虎口、土橋、櫓台、石垣、堀、土間遺構、小鍛冶工房跡、土坑等がある。

富山城の歴史は、越中守護代の神保長職により築城されたことにはじまる。時期は天文 12 年（1543）とする説が有力である。永禄 3 年（1560）には上杉謙信が神保長職を追い、富山城を攻略する。その後、元亀 3 年（1572）には一向一揆による占拠もあったが、天正元年（1573）には謙信は一向一揆を排除し、越中全域をほぼ支配下におさめた。謙信の死後、天正 8 年頃（1580）には織田信長の配下となった神保長住が居城し、同 10 年（1582）にはその支援のために越中に派遣された佐々成政が居城する。しかし、成政は徳川家康・織田信雄に味方して豊臣秀吉と対立し、同 13 年（1585）には、豊臣秀吉による征伐を受けて佐々成政が降伏し、富山城は破却された。その後、慶長 2 年（1597）には、加賀藩二代藩主前田利長が富山城に移った。

慶長 10 年（1605）には、前田利長が隠居して再び富山城に居城し、それに伴い、城の大規模な改修が行われた。発掘調査の成果から、中世富山城の構造は近世富山城と異なっていたことが分かっており、利長が中世とは違う新しい近世期の城づくりを目指したものと推測されている。石垣はこの時に整備されるが、4 年後の慶長 14 年の大火により富山城は焼失する。なお、富山城のまわりには家臣や町人が住む城下町が形成されていた。前田利長は城下町の再整備を大々的に行い、その後、描かれたいくつもの城下町の絵図からは、城下町が城を中心に西側と南側に拡張されていった様子が分かる。

寛永 16 年、加賀藩から分かれて富山藩が成立、寛文元年から城の修理を行う。

現在の富山城は、おおよそ寛文期の構造が基礎になっており、富山市郷土博物館となっている建物は昭和 29 年に戦災からの復興にシンボルとして復元され、国登録有形文化財に指定されている。

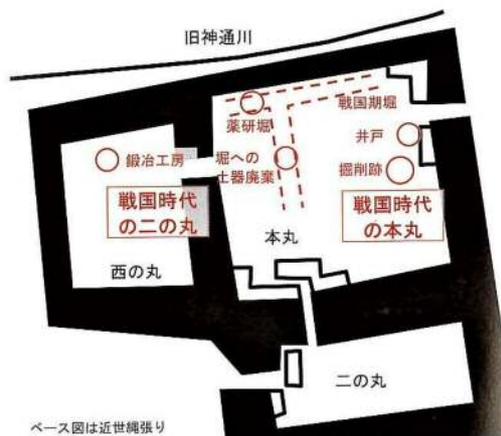


図 2-9 中世富山城の構造
(富山市埋蔵文化財センター2017)

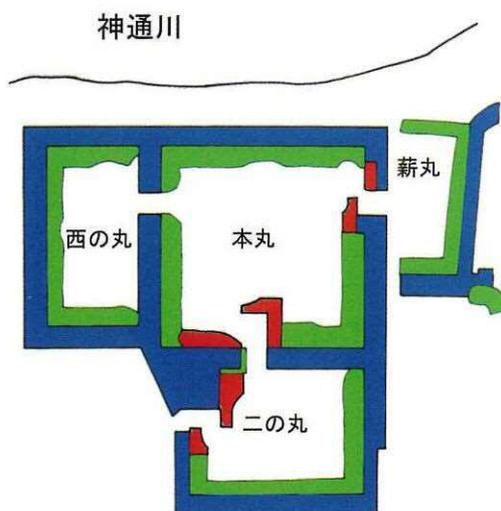


図 2-10 富山城内郭縄張り図（慶長期）
(富山市埋蔵文化財センター2017)

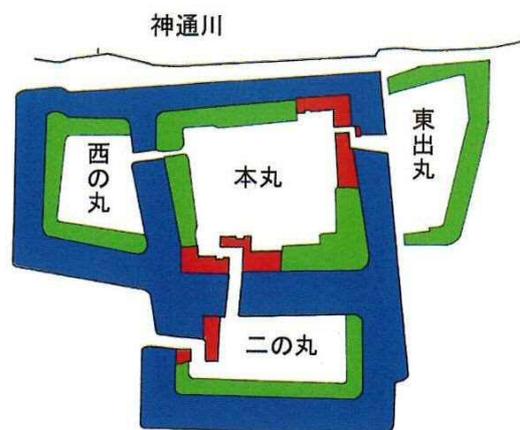


図 2-11 富山城内郭縄張り図（藩政期）
(富山市埋蔵文化財センター2017)

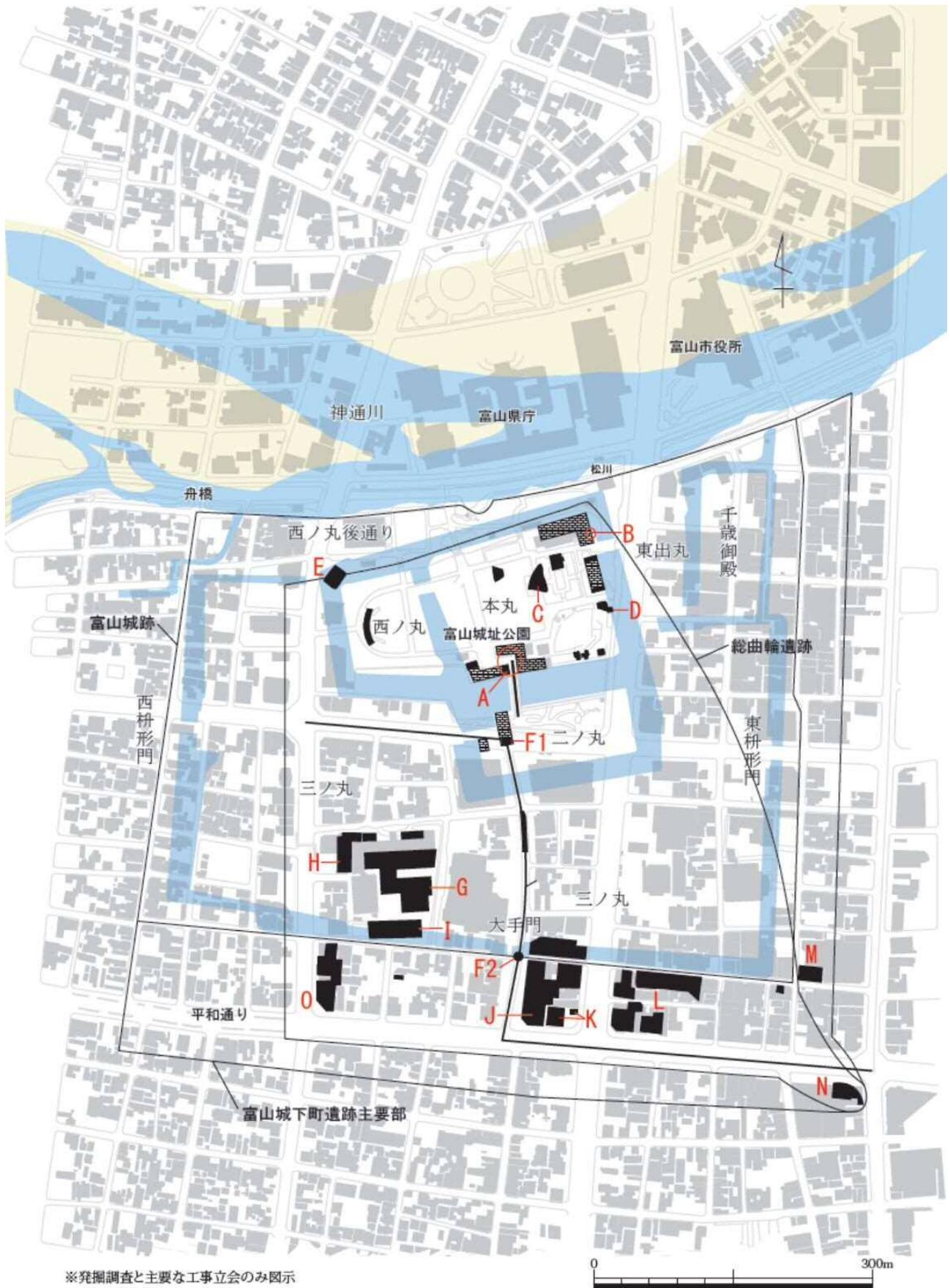


図 2-12 富山城と城下町の発掘調査マップ (富山市埋蔵文化財センター2017)

時代	年号	西暦	富山城の出来事	城主
室町	応永 5	1398	よしみあきより <small>ひがしいわくら じ</small> 吉見詮頼が京都 東 岩蔵寺に「外山郷地頭職」を寄進する	
戦国	応仁元	1467	応仁の乱が勃発する（～1477）	
	天文 12	1543	神保長職が富山城を築城する	じんぼながもと 神保長職
	永禄 3	1560	ながおかげとら <small>うえずぎけんしん</small> 長尾景虎（後の上杉謙信）が富山城を攻める	
	永禄 12	1569	富山城は上杉謙信の支城となる	うえずぎ 上杉
	元龜 3	1572	加賀一向一揆が越中に侵攻、富山城を占拠する	いっこういっぎ 一向一揆
	天正元	1573	上杉謙信が富山城周辺から一向一揆を駆逐する	
	天正 8 頃	1580	織田信長の配下となった神保長住が富山城に帰城する	じんぼながずみ 神保長住
	天正 10	1582	富山城が佐々成政の居館となる	
	天正 11	1583	上杉方の土肥勢が安城（富山城）外町を焼く	さつさなりまさ 佐々成政
	天正 13	1585	佐々成政が豊臣秀吉に降伏、富山城は破却される	
	天正 15	1587	佐々成政は肥後に転封。前田利家に新川郡が預けられる	とよひ 豊臣
	慶長 2	1597	加賀藩二代藩主前田利長が富山城に移る	
慶長 3	1598	加賀藩初代藩主前田利家が隠居、利長が家督を継ぎ金沢城に移る	前田利長	
江戸	慶長 10	1605	前田利長が隠居し、再び富山城に入る。富山城・城下町の整備を行う	
	慶長 14	1609	大火で富山城焼失、利長は高岡に移る	前田利長
	元和元	1615	一国一城令により富山城は廃城となる	
	寛永 16	1639	加賀藩から 10 万石を分与され、富山藩が成立する（幕府から百塚での新城築城が許可され、築城まで富山城を仮の居城とする）	まえだとしつぐ 前田利次
	万治 3	1660	百塚の新城築城が困難となり富山城を居城に定める	
	寛文元	1661	幕府より富山城修理の許可が下り城・城下町の整備を行う	
	延宝 3	1675	城下町から出火し、三ノ丸も延焼する	まえだまさとし 前田正甫
	延宝 5	1677	幕府から富山城普請の許可が下りる	
	正徳 4	1714	失火により本丸御殿が焼失する	まえだとしおき 前田利興
	天明 3	1783	常願寺川が氾濫、富山町を洪水が襲う	まえだとしひさ 前田利久
	寛政元	1789	神通川が氾濫し三ノ丸が浸水する	まえだとしのり 前田利謙
	天保 2	1831	城下町から出火し城内に延焼、三ノ丸の一部を除き焼失する	まえだとしつよ 前田利幹
	天保 4	1833	本丸御殿が再建される	
	嘉永 2	1849	前田利保の隠居所として千歳御殿が建築される	まえだとしとも 前田利友
	安政 2	1855	城下町から出火し城内に延焼、千歳御殿などが焼失する	まえだとしかた 前田利声
	安政 5	1858	飛越地震が発生、石垣が崩れ地割れや泥水の噴出が起こる	
文久 3	1863	城下町から出火し、城内も延焼する	まえだとしあつ 前田利同	
明治	明治 4	1871	廃藩置県により富山県が設置される	
	明治 6	1873	廃城令により富山城は廃城となる	

表 2-3 富山城関連の年表（富山市埋蔵文化財センター2017 を一部改変）

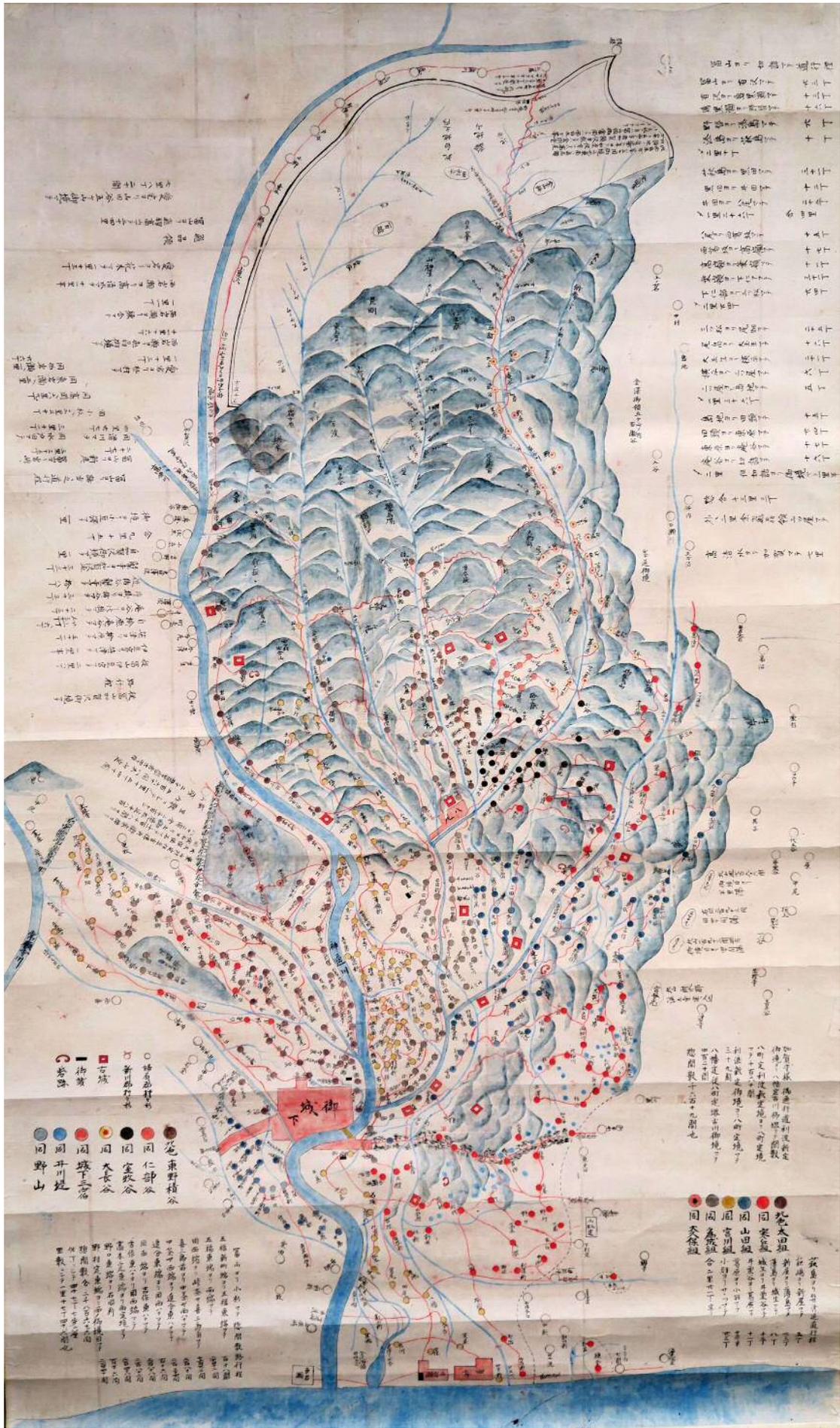


写真 2-3 富山藩領絵図 (富山市郷土博物館所蔵 橋本家文書)

第3項 富山市の社会的環境

1. 人口

富山市は、平成17年4月1日に富山市、大沢野町、大山町、八尾町、婦中町、山田村、細入村の7市町村が合併し、人口・面積ともに富山県の約3分の1を占める自治体となった。

人口は、平成30年3月31日現在で417,227人であり、世帯数では176,768世帯となる。高齢人口比率は29%である。全体としてはゆるやかな減少傾向にあるが、史跡安田城跡が所在する婦中地域では人口の増加が続いている。

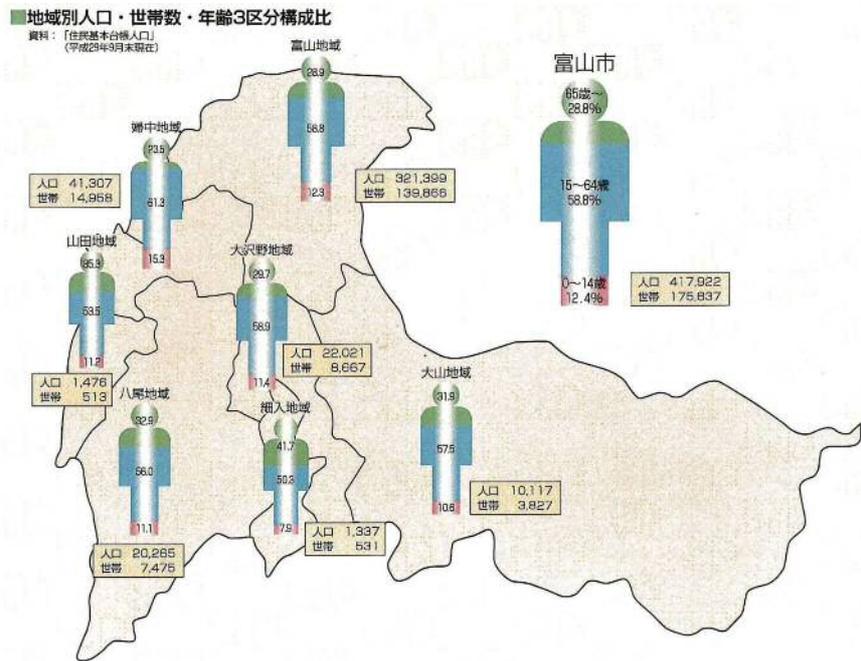


図2-13 地域別人口・世帯数・年齢3区分構成比
(富山市2018『2018統計にみる富山市』)

2. 産業

平成26年7月時点で、市内には21,125の事業所があり、産業大分類の多い順は、事業所数では「卸売業、小売業」「宿泊業、飲食サービス業」「建設業」、従業者数では「卸売業、小売業」、「製造業」、「医療、福祉」の順となっている。平成27年国勢調査による就業者数の合計209,403人であり、第1次産業が4,750人、第2次産業が62,733人、第3次産業が137,048人となっている。

■産業大分類別構成 (平成26年 民営事業所)

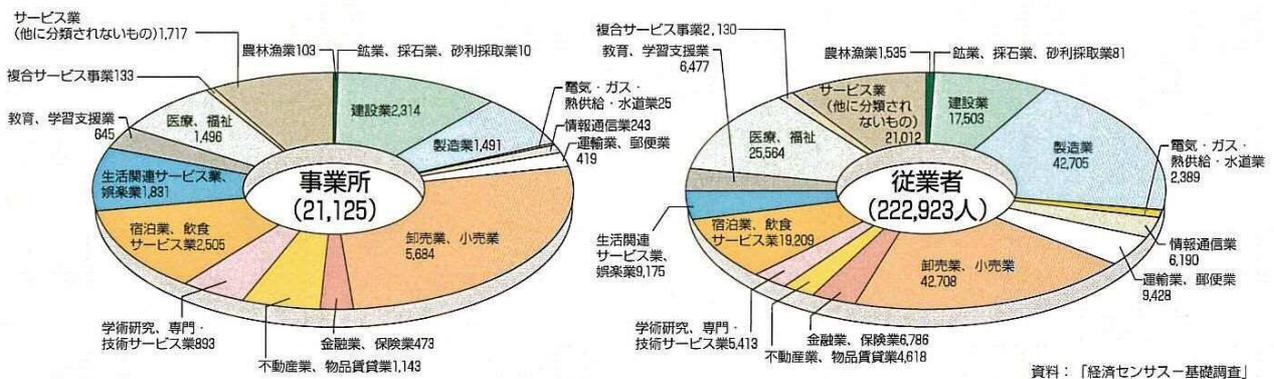


図2-14 産業大分類別構成 (富山市2018『2018統計にみる富山市』)

3. 交通アクセス

富山市は、関東、関西及び中京圏からほぼ等距離にあり、北陸新幹線、あいの風とやま鉄道線、北陸自動車道、国道8号線が東西幹線として、またJR高山本線、国道41号線が南北幹線として整備されており、広域交通の結節点となっているほか、富山港、富山空港も所在し、陸、海、空の交通の要衝地となっている。

史跡安田城跡は富山市の西北部に位置しており、史跡へのアクセスは、自動車を利用する場合、北陸自動車道富山西インターチェンジから車で約10分である。その他の交通手段としては、電車・バスが挙げられるが、JR富山駅からは車で約20分、JR高山本線速星駅からは車で約5分、同婦中鵜坂駅からは徒歩で約25分かかる。バスを利用する場合、富山駅発の富山地铁バス富山大学附属病院行き約40分、「安田」下車後徒歩5分のほか、富山市婦中地域の一部を巡回する婦中コミュニティバスすいせん号があるが一日2便程度しかなく運行数の面で十分とはいえない。史跡へのアクセス環境は、自動車利用以外は、あまり良いとはいえない状況である。

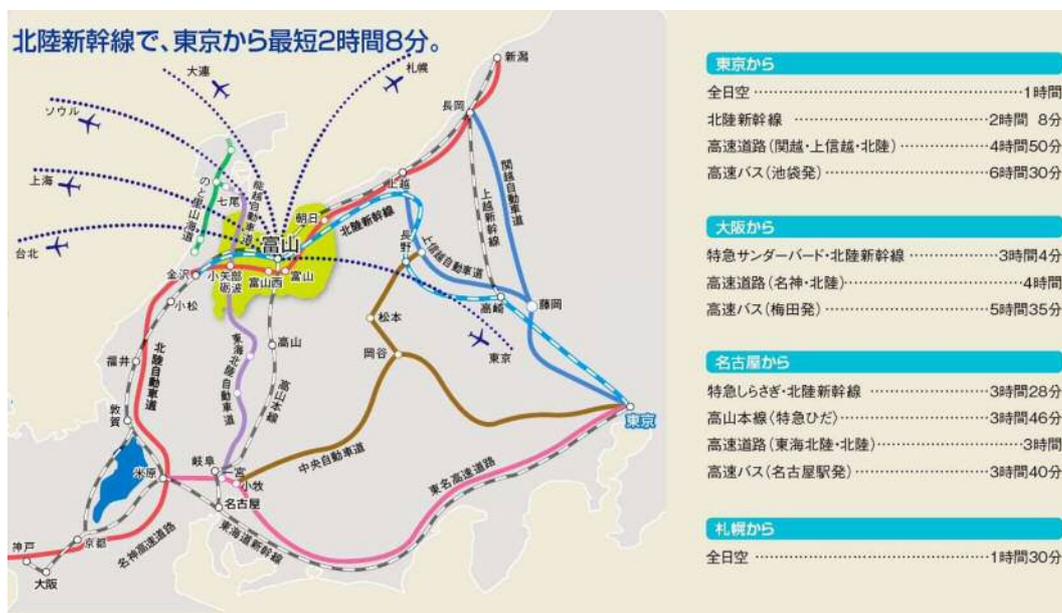


図 2-15 富山市へのアクセス (富山市 2018『富山市勢要覧』)

4. 周辺の文化財及び関連施設

富山市内には国指定 26 件、国登録文化財 18 件、県指定 48 件、市指定 149 件の計 241 件を数える指定文化財等がある。このうち国指定史跡は、安田城跡のほかに「北代遺跡」(縄文時代の集落)、「王塚・千坊山遺跡群」(弥生～古墳時代の墳墓・古墳や集落)、「直坂遺跡」(旧石器、縄文時代の集落)の 4 件がある。

歴史・文化財関連の施設では、安田城跡に距離的に近いものでは、史跡北代遺跡の土屋根竪穴住居などを実物大で復元しており各種体験学習もできる「富山市北代縄文広場」や富山城の歴史を模型や映像も使いながら紹介する「富山市郷土博物館」(建物は国登録有形文化財)、県内の遺跡に関する展示や考古学の体験学習ができる「富山県埋蔵文化財センター」のほか、「呉羽丘陵フットパス」(呉羽丘陵の尾根に沿って設けられた自然歩道)の周辺には、民芸・美術・売薬・民俗・考古を展示・紹介する博物館施設群である「富山市民俗民芸村」や白鳥城跡の散策ができる「城山公園」などがある。また、市内には、文政 11 年に建てられた加賀藩奥

山廻役（立山・黒部一帯の山林保護や国境警備の巡視を行う役職）の役宅で、国重要文化財に指定されている「浮田家住宅」、明治11年頃に建てられた北前船廻船問屋で、主屋などが国重要文化財に指定されている「旧森家住宅」、常願寺川の治水と発電・亀山銀山などの史料を展示する「富山市大山歴史民俗資料館」、飛騨街道の要衝に置かれた西猪谷関所に関する歴史が分かる「富山市猪谷関所館」などがある。

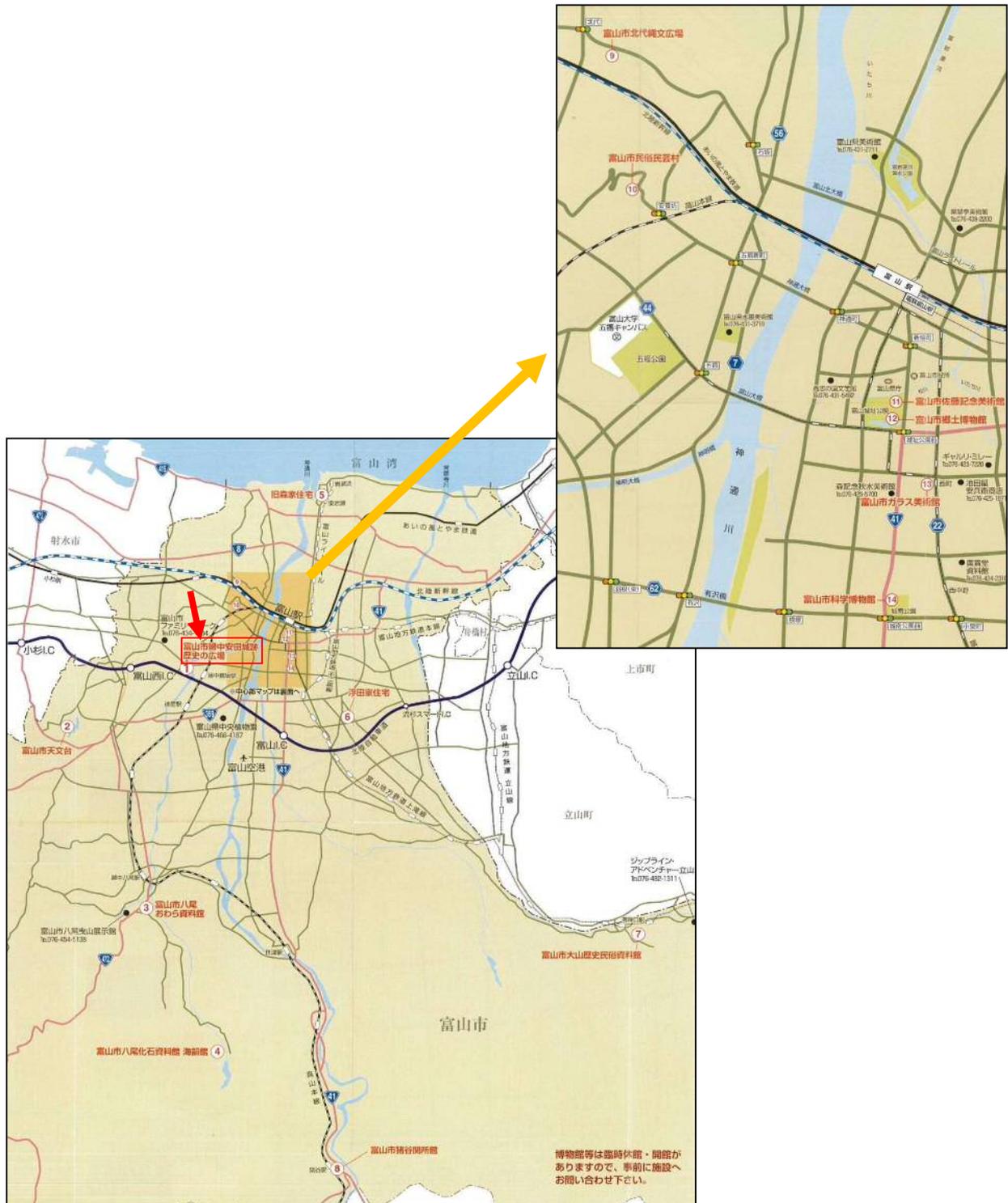


図 2-16 富山市の博物館等の位置 (富山市教育委員会 2018『富山市博物館等ガイドマップ』)

5. 土地所有及び土地利用

史跡指定地及び資料館所在地は全て、昭和 55 年度に先行取得し、昭和 56 年度から昭和 60 年度にかけて国庫補助事業（史跡等買上事業）で公有化しており、現在、史跡公園「富山市婦中安田城跡歴史の広場」として利用している。

区分	登記簿面積	所有者
史跡指定地	30,267.51 m ²	富山市
資料館・イベント広場（駐車場等）	2,413.37 m ²	富山市
	32,680.88 m ²	

表 2-4 土地所有状況

※史跡指定地の実測面積は 34,338 m²

6. 関連計画

史跡指定地は、都市計画法による都市計画区域（富山高岡広域都市計画区域）にある。市街化調整区域に区分され、土地利用にあたっては開発行為が原則として許可されない等の規制を受ける。

安田城跡の再整備事業については、富山市総合計画（「第 2 次富山市総合計画・前期基本計画」計画期間：平成 29～33 年度）には現在のところ位置付けられていない。

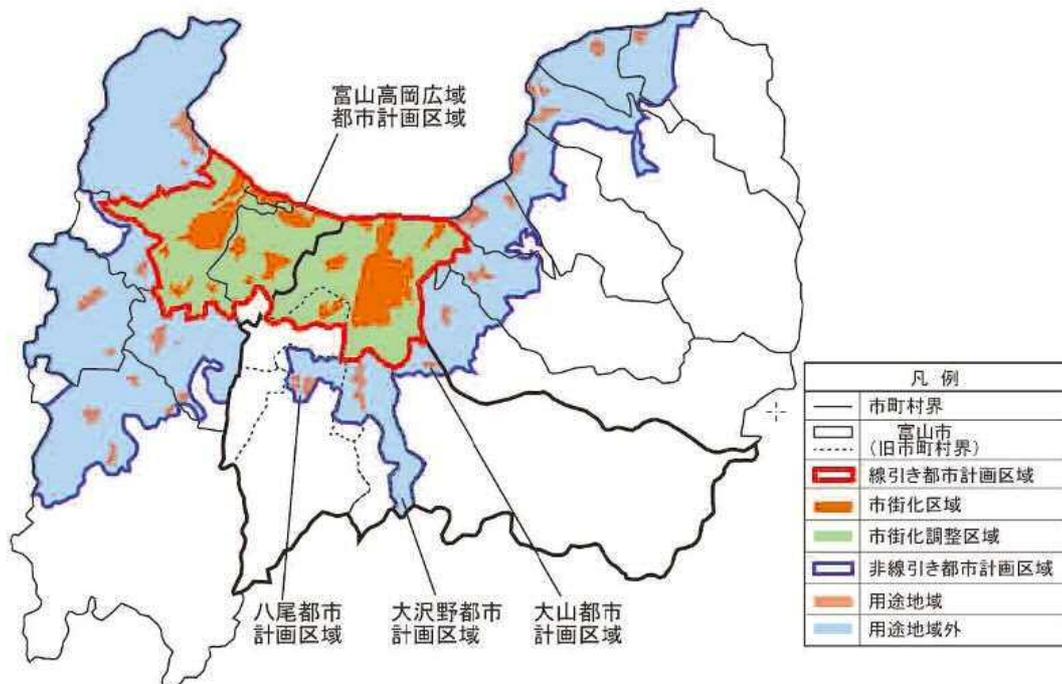


図 2-17 富山市の都市計画区域（富山市都市整備部 2016「富山市の都市計画 平成 28 年度」）

第3節 史跡安田城跡の概要

第1項 安田城の歴史と調査成果

安田城跡は、神通川支流の井田川左岸に位置し、標高約12mの扇状地に立地する。井田川は南方約2.5km遡ると山田川と合流し、山田川の谷筋に沿って西に向かうと砺波平野へ至る。城跡の西方約800mには城山を最高峰(145m)とする呉羽丘陵が延びており、その西側は射水平野となる。

安田城は、通説では、天正13年(1585)の羽柴(豊臣)秀吉による越中出陣の際の前線基地として、佐々成政が居城した富山城と井田川を挟んで対峙するように白鳥城や大峪城とともに置かれた城とされている。

安田に城が築かれた背景には、当地の地理的環境がある。西からのルートとしては、射水平野から呉羽丘陵越えに安田付近に至る街道があり、安田に近い金屋には古くより渡し場があり、中世には西から富山城下に入る交通の要衝となっていた。南からのルートとしては、安田城の西側に飛騨方面から八尾、長沢を経て当地に至る街道があり、こちらも南北ルートとして重要なものであった。このように、安田城は東西ルート、南北ルートが合流する交通の要衝をおさえた場所を選んで築かれている。また、自然地形を活かしながら敵の攻撃を阻む要害を築く上でも、すぐ東に井田川が流れるこの地は最適な環境にあったといえる。

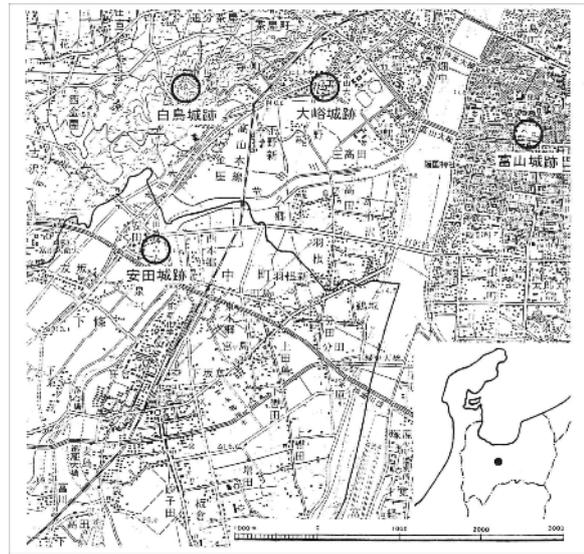


図2-18 安田城跡の位置

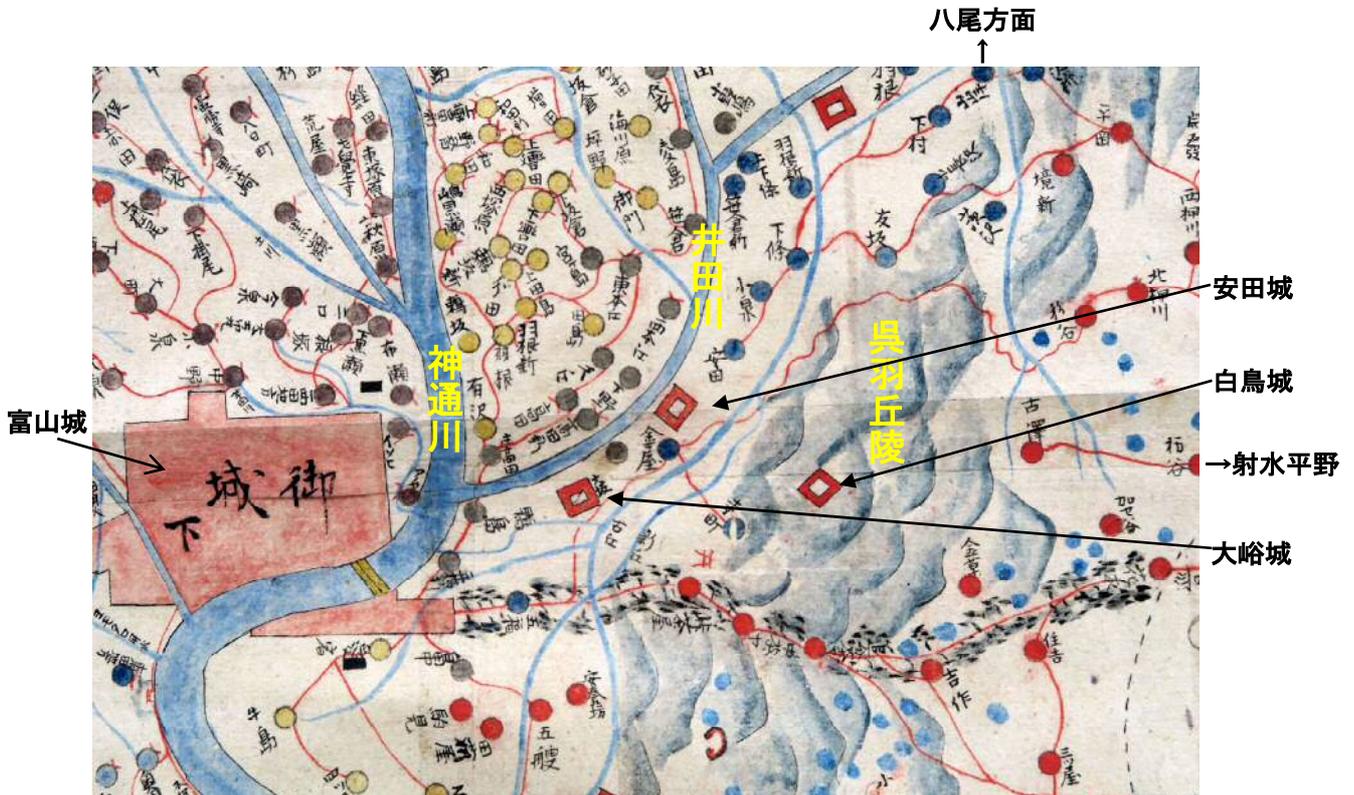


写真2-4 富山藩領絵図(部分)に加筆 (富山市郷土博物館所蔵 橋本家文書)

整備前、曲輪は微高地として残されており、おもに本丸・二の丸は畑地、その他は水田として利用されていた。

安田城跡のある土地は、殿町、殿町割という小字名であり、通称名として、本丸はオオシロ、二の丸はコシロ、右郭はカネツキドウ、その他にヘイマワリ、マゴサヤシキ、ホリ、カワラ等、城と関連する名称で呼ばれていた。



写真 2-5 整備前の状況（北から）

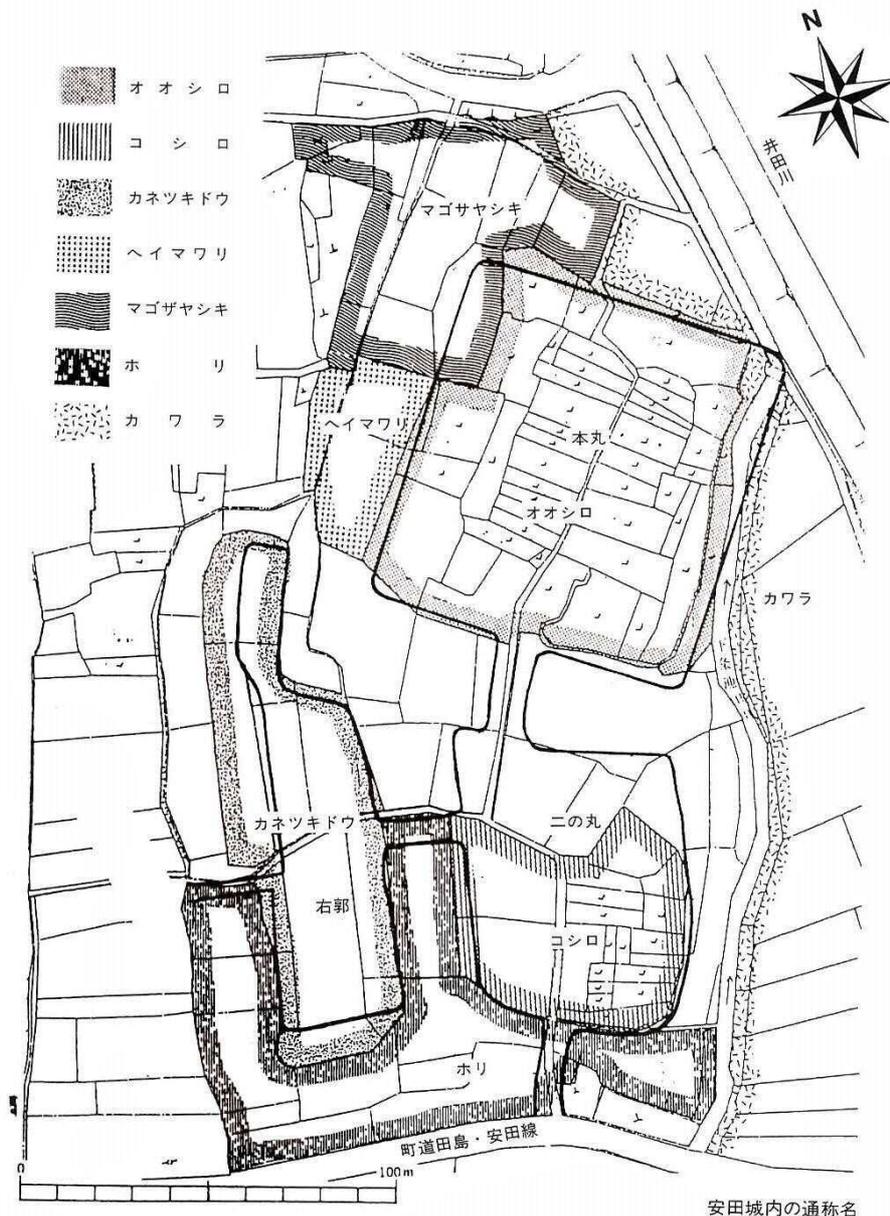


図 2-19 安田城跡内の通称名

安田城跡の発掘調査は、昭和 52・53・61・62 年度、平成 2 年度に実施され、本丸、二の丸、右郭の三つの曲輪、堀、土塁、曲輪を繋ぐ土橋等が確認された。

こうした城の構造は、「越中安田古城之図」と重なる。この絵図は、江戸時代文化年間（1804～18）に、富山藩士安達淳直・直章によって測量・作図されたものである。左側には「天正 13 年秋金屋村ノ背上白鳥城ヨリ岡嶋喜三郎吉長、此城二移リ、後加府二帰ル、吉長ノ代官平野三郎左衛門居之トイエドモ、是モ加府二帰リ、其後廢城トナリタルト云々」とある。絵図からは、井田川が古くは城の東側に沿って流れ、堀は井田川の水を引き込んでいたことが分かる。加賀藩士富田景周（文政 11 年 [1828] 没）の著『越登賀三州志』に記述された曲輪の規模はこの絵図に記録されたものと一致しており、この絵図に基づいたとされる。また、本丸・二の丸・右郭の呼び名は絵図にはなく、富田景周が『越登賀三州志』を記述する際に便宜上付けたものと推測されている。（高岡 1996『婦中町史 通史編』）

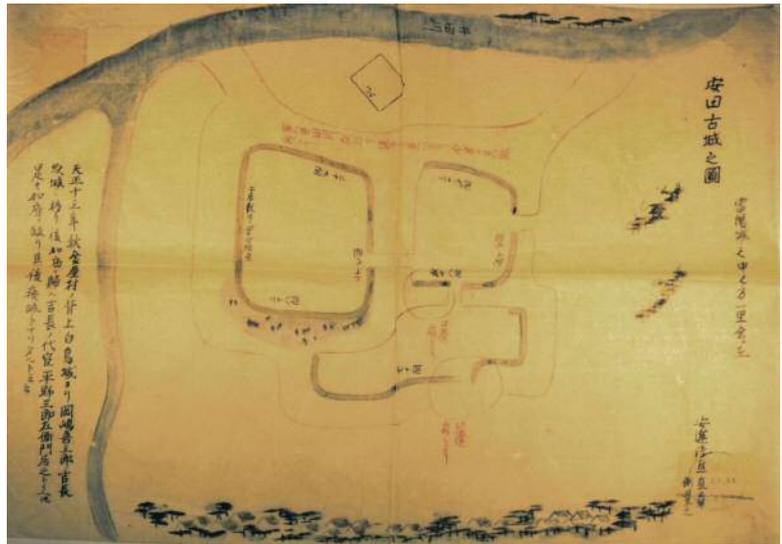


写真 2-6 越中安田古城之図

（金沢市立玉川図書館所蔵 加越能文庫：金沢市指定文化財）

発掘調査で分かった城の規模は、東西約 150m 南北約 240m で、本丸は南北約 80m 東西約 90m、二の丸は南北約 80m 東西約 70m、右郭は南北約 130m 東西約 10～26m である。

曲輪を囲む堀は、幅 10～26m、深さ 0.8～1.4m を測る。

土塁は、本丸では基底部の幅が 14m で、高さは現状では 1.8m だが、本来は 2.4m と推定される。土塁の立ち上がり角度は 40～45 度である。土塁は、中央に粘土を山形に置いた後、砂礫土と粘土を交互に斜め積みし、表層を礫で平坦に覆って築かれている。曲輪全体をめぐっているのは本丸のみで、古絵図をみると、二の丸では本丸側、右郭では本丸側と二の丸側には土塁がなく、本丸に対しては開放された形を示している。



写真 2-7 本丸土塁の土層断面

二の丸には本丸方向へ幅 5m、長さ 5.5m の、橋台と考えられる突出部があることから、幅約 3.6m、長さ 18m の木橋が架けられていたと推定されている。

二の丸南側には、城外と結ぶ土橋が現存するが、発掘調査の結果、廢城後（江戸時代）の農道と判断された。従って、城内に入る道は西側の 1 箇所のみで、右郭から二の丸を経て本丸に至ることになる。



写真 2-8 二の丸突出部（橋台）

本丸内南東部では、深さ約 1m に柱穴群が確認され、建物礎石の可能性のある人頭大の礫と小石を詰めたものもあったが、建物規模等が分かるデータは得られていない。



写真 2-9 本丸南東部の遺構



写真 2-10 礎石とみられる穴

出土品の殆どは、堀の埋土から出土した。約 9 割は中世土師器で占められ、灯明皿として用いられたものが多くあった。また瀬戸美濃の天目茶碗や中国製の染付皿、越中瀬戸の皿・すり鉢などの陶磁器のほか、短刀、鉄釘、銅銭、砥石、とりべ、炉壁（溶解炉の破片）、石臼、石鉢などが出土した。

安田城跡の城主については、「越中安田古城之図」には先述の通り、天正 13 年（1585）秋に岡島が白鳥城から安田城に移り城主となり、岡島が金沢に帰った後は代官平野三郎左衛門がいたが、まもなく廃城になったと記されている。また同図が参考とされた『越登賀三州志』によれば、天正 13 年、羽柴秀吉が佐々成政を討伐するため白鳥城に陣を構えた際、前田氏家臣岡島一吉が安田城に移り、その後、慶長 2 年（1597）に前田利長が富山城に移った際、岡島一吉と片山伊賀が再び白鳥城に配置されたが、同城は山が高く風当たりが強いことから、願い出て安田に下りて居城したとされている。また岡島一吉は、天正 18 年（1588）に安田村の中堂寺に田島を寄進しており（中堂寺文書）、この時点での安田城への居城を示している。



写真 2-11 中世土師器

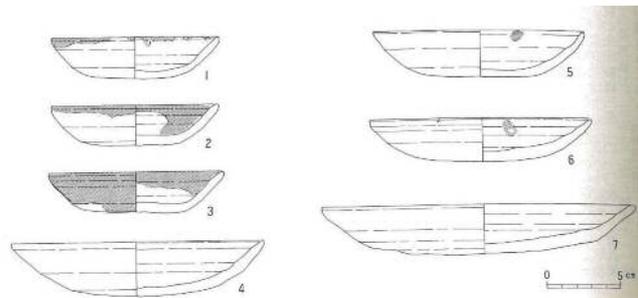


写真 2-12 瀬戸美濃の天目茶碗

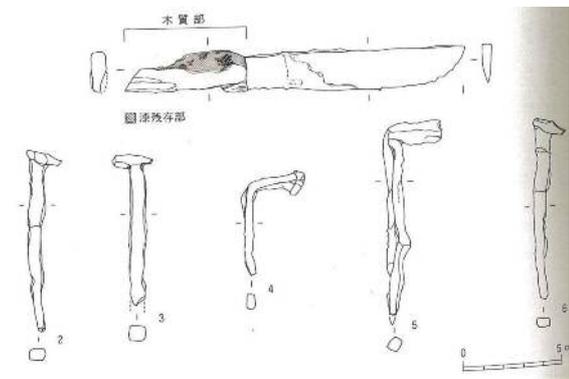


図 2-20 出土品の実測図（中世土師器、鉄製品）



図 2-21 発掘調査箇所図

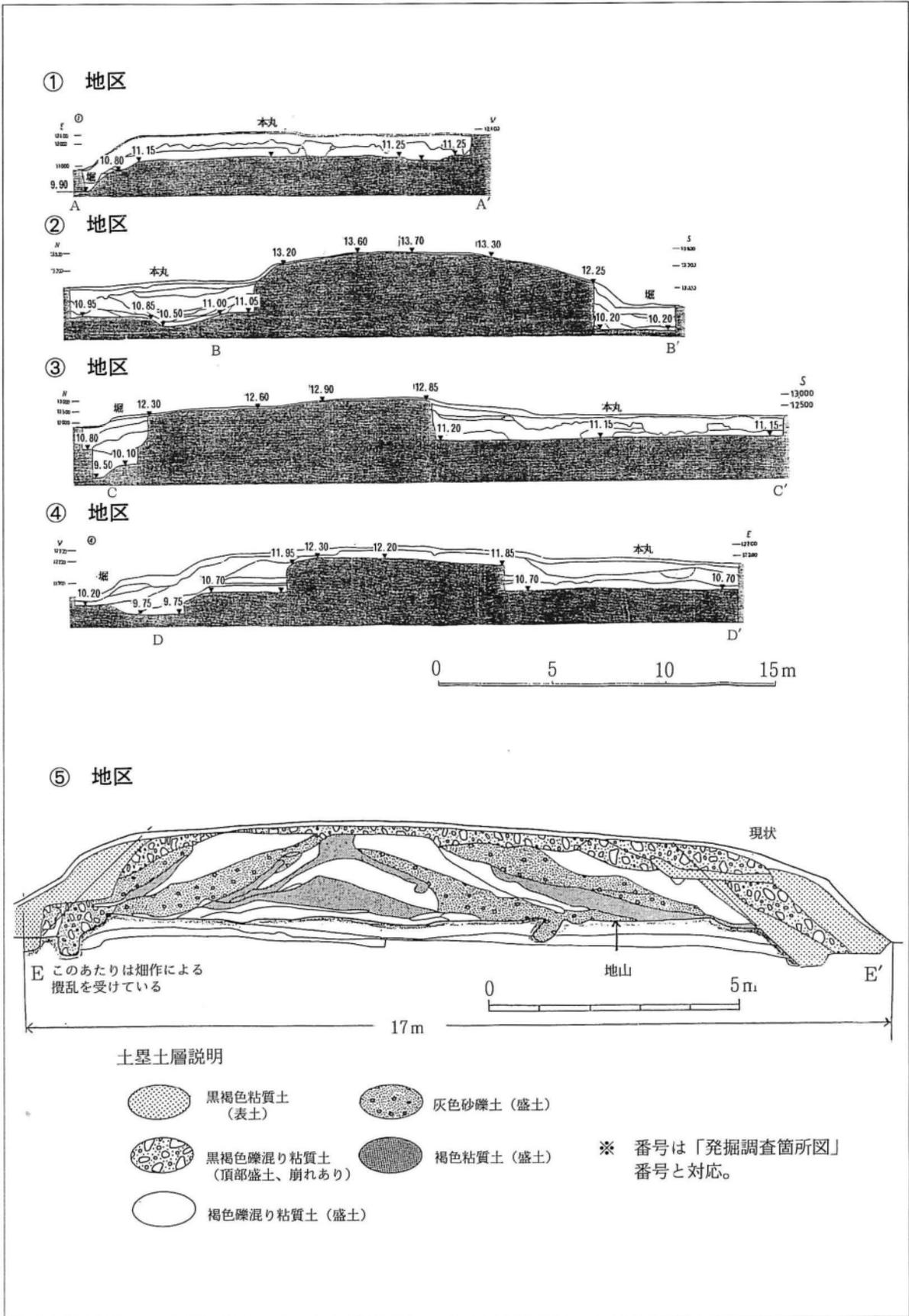


図 2-22 本丸土塁 断面図

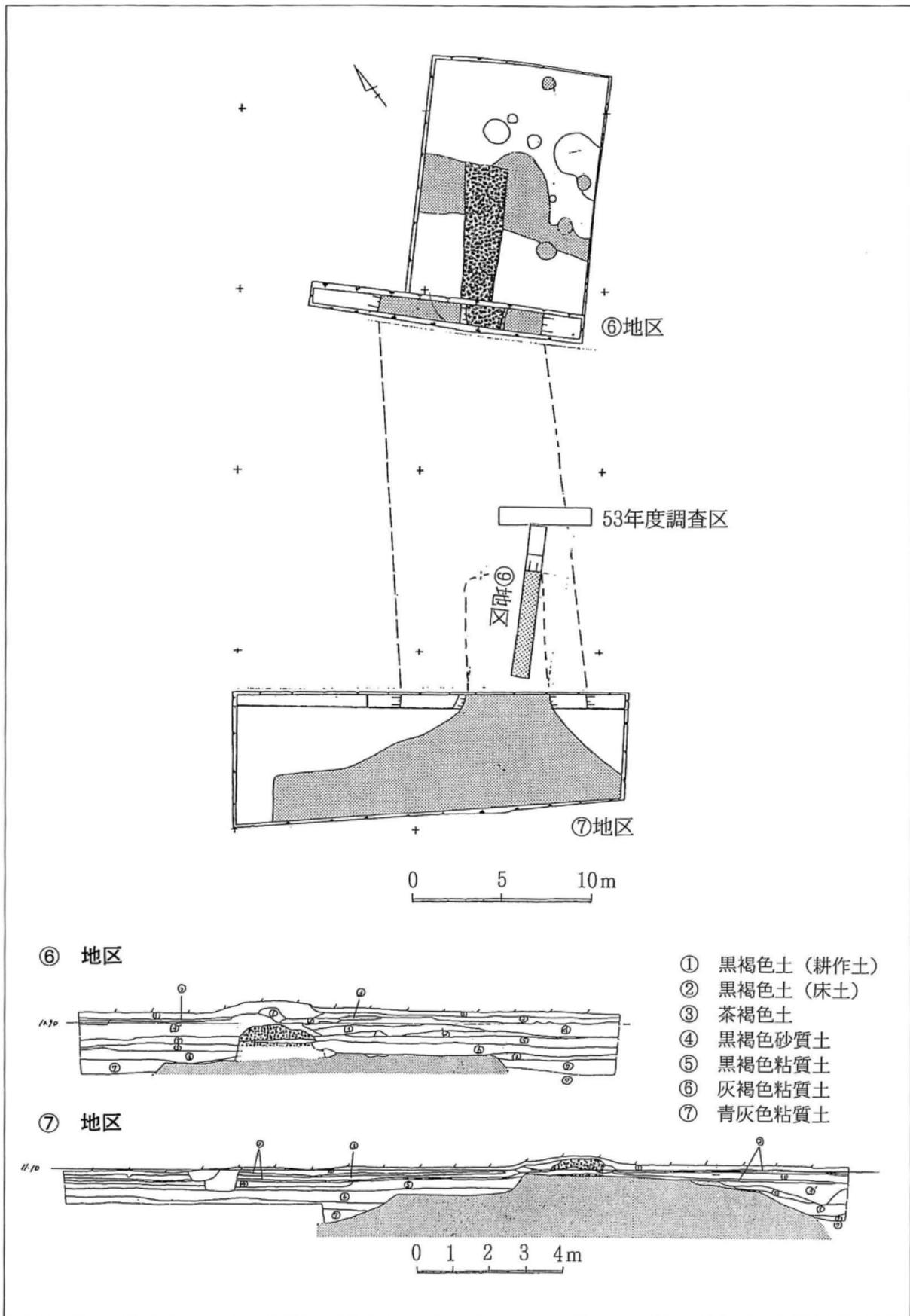
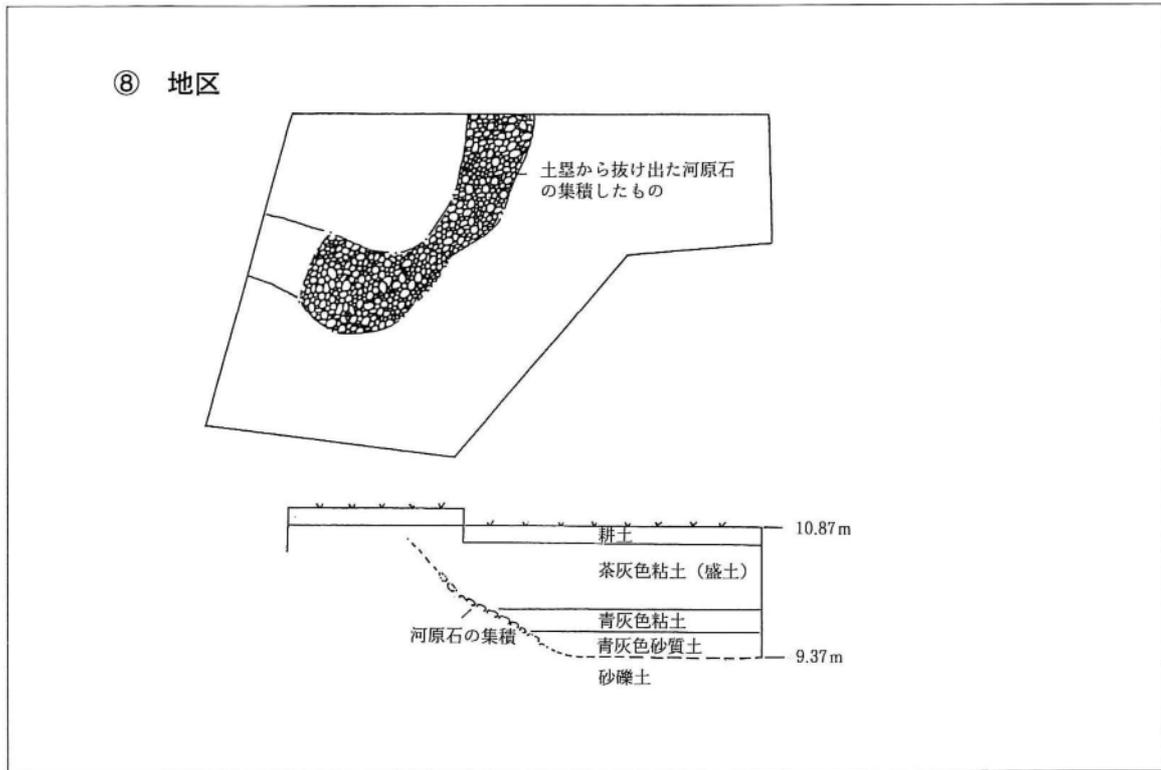
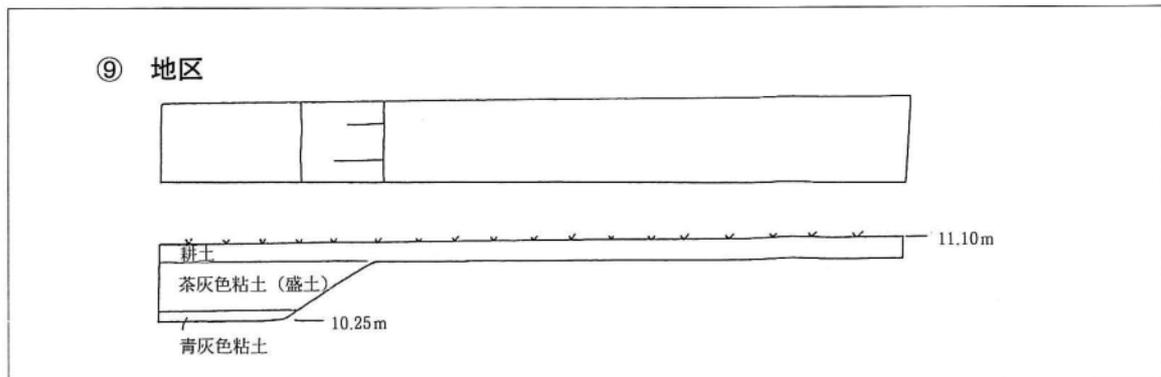


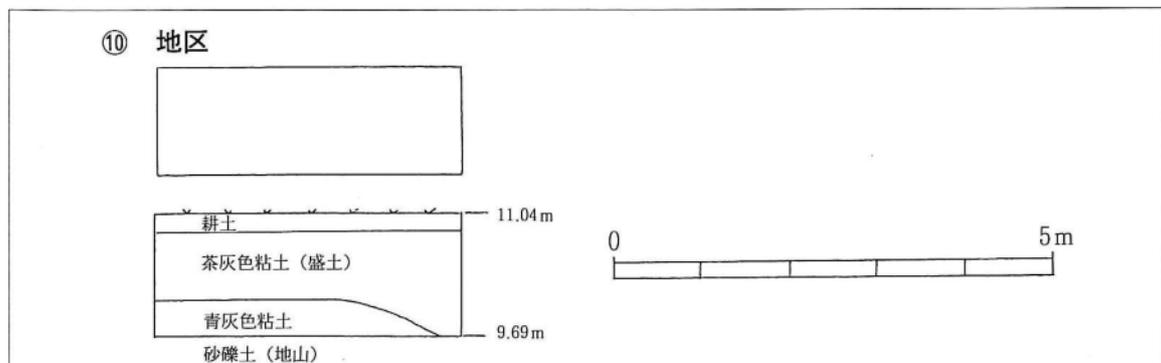
図 2-23 本丸一二の丸間土橋 平・断面図



本丸西南隅 平・断面図



二の丸突出部 平・断面図



二の丸一右郭間 平・断面図

図 2-24 発掘調査 平・断面図

第2項 近年の研究

近年、安田城や秀吉の越中出陣をめぐる研究は、史学、考古学ともに進展をみせている。ただし、研究者によって見解が異なる部分もあり、今後の更なる研究の蓄積が必要である。以下に近年の研究の概要を記す。

◎近年の研究1 安田城の各曲輪の成立過程について

安田城は、本丸が整然とした方形であるのに対し、二の丸・右郭は不整形であり、両者の主軸には約30度のズレがある。また、出土遺物には、戦国時代のもののほか、鎌倉時代後半にさかのぼるものが出土している。以上の点から各曲輪の築造には時期差があると推測される。

これについて、昭和53年試掘調査では、鎌倉時代に在地武将の居館として本丸がすでに存在しており、それが戦国時代の動乱期を背景として防備を固めるため二の丸・右郭が新たに付加され、秀吉による越中出陣に際して軍事的役割を果たしたと推定した。(富山県教育委員会 1979『富山県ほ場整備関連事業埋蔵文化財発掘調査概要 婦中町安田城跡 魚津市佐伯遺跡』)

一方、近年の研究では、県内の在地武将の居館(高岡市木舟城など)が不整形の曲輪による2郭構造の城郭であることが分かってきており、安田城も当初は在地武将が二の丸・右郭による2郭構造の城郭を築き、その後前田家が本丸を追加して大規模改修したと推定している。

後者の説では、白鳥城の支城である安田城と大峪城はいずれも秀吉が京都に築城した聚楽第と同じく方形曲輪を用いていることから、最新の築城技術を持った前田家によって県内でもいち早く採用された聚楽第型城郭であるとしている。また城が大規模改修された時期については、佐々降伏以降の可能性があるとし、確証がないながらも、「富山城との距離が比較的近接している」ことから、「東の上杉勢力に備えた詰城を白鳥城と位置付け、安田城・大峪城はその前線を守る支城として存在した」と推定している。(古川知明 2012「Ⅲ茶屋町東遺跡(測量調査)」『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅶ』富山市埋蔵文化財センター)

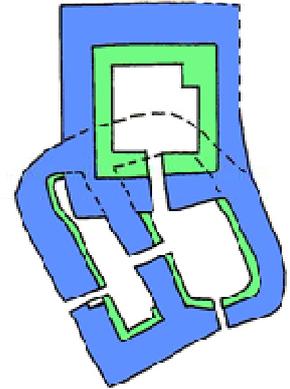


図2-25 安田城の縄張
(古川 2012)

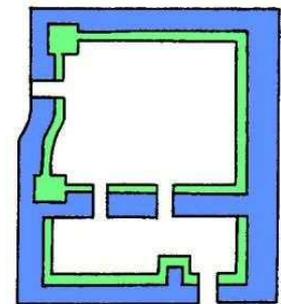


図2-26 大峪城の縄張
(古川 2012)

◎近年の研究2 秀吉越中出陣について

従来、「佐々攻め」と形容されてきた越中出陣については、『越登賀三州志』の記述に基づき、天正13年8月に関白秀吉が十万の大軍を率いて呉羽丘陵の白鳥城に本陣を構え、富山城の佐々成政を威圧した結果、成政は剃髪して降参を願い出たとされてきた。

しかし、萩原大輔は、越中出陣は成政討滅のみを目的とするものではないとし、秀吉軍の人数や富山城破却の背景など、通説の捉えなおしを次のように行っている。

秀吉軍の人数については、宣教師ルイス・フロイスの報告に秀吉が6万の兵を率いて出発したことが記されており、最前線には前田勢1万人が既にあつたので、越中に押し寄せた秀吉勢

は総勢7万人余りであったと推定している。

また、「佐々攻め」という呼称は、越中出陣の一側面を照射しているにすぎないと指摘している。越中出陣には、まず、総大将に旧主織田信雄を据えることによる自身との上下関係の軍事的な可視化という、小牧・長久手の戦いの総括としての側面を有していた。さらに、秀吉自ら富山城まで赴いた理由は、幻に終わった上杉景勝との会見のためであった。秀吉は、信雄・景勝との明確な主従関係を一挙に構築しようと企図したとしている。

成政降伏前後の行程については、天正13年8月に越中出陣が敢行、富山城は秀吉と上杉景勝との会見場所に設定され、成政を降伏させた秀吉は閏8月1日に富山城に入城、仕置を行った。しかし、景勝が出仕しなかったため、秀吉は4日、大阪城への強制出仕要求という強硬方針を示し、自身は呉服山（※白鳥城）まで退いた。5日には富山城の破却を命じて会見中止を決定、6日に帰途についたとしている。

なお、これにより、白鳥城に秀吉自身が逗留した日数は、佐々降伏後のわずか1日のみであることが分かる。

（萩原大輔 2010「天正年間中期の富山城」『富山史壇』第161号、萩原大輔 2010「「佐々攻め」を捉えなおす一天下人秀吉と富山城―」『秀吉越中出陣―「佐々攻め」と富山城』富山市郷土博物館）

◎近年の研究3 白鳥城・大峪城・安田城の築城あるいは改修の時期とその背景について

白鳥城・大峪城・安田城は、前田氏（あるいは豊臣軍）が佐々成政攻めの最前線基地として、築城あるいは改修したとされている。しかし、城郭研究者であり土木技術者でもある佐伯哲也氏は、次の点からこの説を否定している。

大峪城の築城に要する日数から検討した場合、現地の調査・測量、設計、伐開、縄打ち、堀の開削、土塁の構築、本丸高台の構築、法面の土羽打ち、土塁の版築等の作業を経て、規模が大きな大峪城を築城するには、1,000人の土木作業員が1日12時間労働したとしても1年弱かかり、建築物を含めるとさらに日数を要することが推測される。一方、前田氏がこの地に進軍できたのは守山城・増山城が落城（8月19～26日）した後であり、成政降伏（8月26日）まではわずかな日数しかない。よって、この期間に大峪城の築城あるいは改修を行うのは不可能である。

このことから、前田氏が城を築城あるいは改修した時期は、成政が降伏して神通川以西が前田領となってからであり、その目的は領地境に大規模な城を配置して、神通川以東の佐々領を監視することにあつたとしている。

（佐伯哲也 2015 安田城跡歴史の広場歴史講座①資料「城郭遺構から読み解く佐々成政討伐後について」、佐伯哲也 2017「I 越中の城郭 12 白鳥城」『図説日本の城郭シリーズ⑤ 戦国の北陸動乱と城郭』戎光祥出版）